

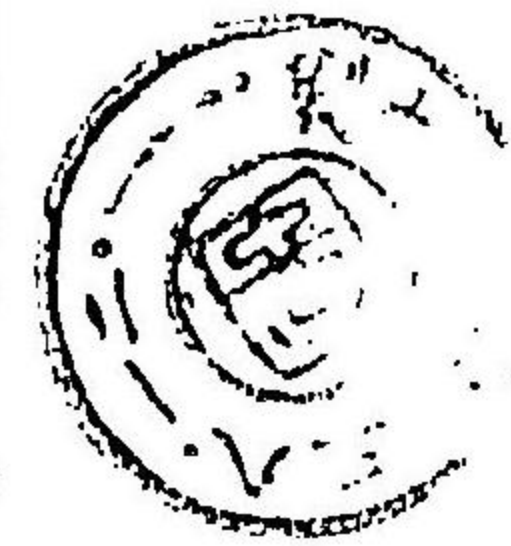
文學士保科孝一述



語

學

完



早稻田大學出版部藏版

言語學目次

| | | |
|-----|-------------------|-----|
| 第一章 | 言語わたえず變化するものであること | 一 |
| 第二章 | 言語の構造について | 三九 |
| 第三章 | 屈折語に屬する語族 | 四九 |
| 第四章 | 語彙構成の状態について | 七三 |
| 第五章 | 語詞の成立について | 九三 |
| 第六章 | 品詞の發達とその分類 | 一一九 |
| 第七章 | 言語上に於ける諸法則の成立 | 一五一 |
| 第八章 | 言語の性質 | 一七七 |
| 第九章 | 國語と方言との關係 | 二〇九 |
| 第十章 | 言語の進歩 | 二二九 |

第十一章 標準語……………二六一
第十二章 言語と文字との關係……………二九五

言語學

緒言

言語學の重要な學科であることが、近來だん／＼世間に知られて來たのわ、まことに喜ばしいことである。しかるに、現今此學科お、きわめて了解し易く、簡明に講述したものが無いから、これお學ぶ人々の不便、實に尠からざることと信ずる。そこで以上の缺陷おいさゝか補いたいとゆゝ希望お以て、この學年からこれお講述することになったが、しかしながら、はたしてその目的お達し得るかどゝか、すこぶる憂慮にたえない次第である。けれども、できるだけだけわ力お盡すつもりである。それで、この講義

の結構わ Peile 氏の Philology に倣いその他諸學者の學說を參酌し、なるべく國語の例證を取って進むつもりである。ただその事だけちよつと一言斷つて置くのである。

明治三十七年十月

講述者しるす

言語學

文學士 保科孝一述

第一章 言語わたえず變化するものであること

言語學 (Science of Language) といふ一學問かとゆへと、それわ言語といひかなるものであるか、説明する科學である。それゆえ、言語學者わ國語 (a Language) と組織する語詞 (words) について、その意義を研究し、その發達、變化等と説明する任務もあるものである。この任務を果すために、わ言語學者、わ各語詞の構成されている状態、また、その間の關係等と説明することが必要であるから、この自的に向つて、植物學者か花卉を分析するとおなじよ、これらに、これらの語詞を分析して研究することもある。それで、かくのごとき研究を、單に一の國語についてばかりでなく、他の諸國語についても、おなじよ、に行うのである。それで、こゝゆへ、研究によつて得た結果、おたがいに比較して、各國語間に共通なる事實、あるい、わある國語にのみ特有

な現象も発見し、つぎに言語の發達變化の現象、言葉も換えていえば、言語が生命も有するものであるとゆゑ、事實も説明するため、各國語に存在する諸種の法則も発見することゝ力めるものである。

以上の説明で、言語學の職分をほぼあきらかになつた。ともいふが、もつと一参考として、ヘンリー・スウィート(Henry Sweet)が、History of Languageのなかに説いているの

も、越へて見よ。すなわち、
言語學の職分は、まづ第一に各國語に存在する種々の現象たとへば、聲音の轉訛、聲音の消滅意義の變化等の性質について、詳細に説明し、つぎに、これらの現象も惹き起す原因、國語上にいかなる結果も惹き起すものであるか、これらの現象も惹き起す原因、わいかなるものであるか、これらの上にいかなる法則が存在するか、等の問題も解決するものである。これゆゑ、言語學つまりつぎのごとき問題も解決すべき職分も有するものである。

- 一、 言語わいかにして變化するものであるか、
- 二、 一國語がたがいに似寄つた數種の國語に分岐する手續わいかなるもので

あるか、

- 三、 二つ以上の國語を比較して見て、それがたがいに似寄っているかどいふか、とゆゑ、ことゝ確定し、あるいわ、これらの各國語の似寄も発見するにわいかにすればよろしいか、

- 四、 名詞、動詞および他の品詞などの區別の發生したる原因わいかなるものであるか、

五、 文法上における各種の形式の發生したる原因わいかなるものであるか、このほか、言語の起源、言語と人種との關係、言語學と言語教授法、またわ、その他の種々の科學との關係なども、研究しなければならん。

とゆゑのである。
われわれが言葉も學ぶ目的、わ、どこにあるか、とゆゑ、と、その言葉もただしく話したり、書いたり、しよゝとゆゑのである。それゆゑ、單にその言葉の意義と、その使用する方法と、知ることが出来れば、よろしいので、それより一歩進んで、各語詞構造の狀態なども、くわしく、知る必要もない。また、その語詞も自國語か、外國語かなどゆ

「こと」も知る必要がない。「行燈」が唐音であることや「洋犬」が come の誤解に原いて、出来た言葉であることなど、殆ど知る必要がない。それで、單に實用上の目的からならば、實にその通であるけれども、他の側から見たら、ど「てある」か。「洋犬」とゆ「名稱」が、come の誤解から起つたもの、とゆ「事」が分たら、随分面白いことであらまいか。すべての物體が、ど「して出来ているもの」であるか、その名稱がど「してその物體を表彰するよ」になつたか、とゆ「よ」な原因を知る事が出来たら、随分愉快に感じわしいか。ことに言語わわれ「が實際使用してゐるからこそ、生存しているもので、永久に一定不變なものでない。その上に、發生發達變化またわ消滅等の現象が、存在しているものであることが、あきらかになつたら、一層愉快に感ずるだろ」とおも「。言語の史的發達の上になつて、稗史小説などよりも、ズット面白い事實がしば「く」ないでもないし、それにまた、人間の心的作用に原づく暗黒な行動に、一條の光明を與えるよ「な」こともあるから、これらの事實を研究するのわ、決して乾燥無味なことでない、随分興味津々たるものである。

やしむのである。たとえば、名詞わその事物、またわ、その性質の名稱である。 oak に對する名稱で、 beech に對する名稱でない。「善」わ「惡」の意義とわ、まったく違ふ。しかるに、それらの事物とか、性質とかが、すこしも變化しないのに、それ對する名稱が、すこしもかわらずに、他の事物や性質を表彰するよ「な」ことがあるのわ、すこぶる妙であらまいか。かくのごとき激しい變化わ、そ「しば」く起るものでないけれども、随分その例證がある。希臘で、柏を意味する言葉が、羅馬で、樅が變つたわけでないの、 oak とゆ「語」詞が、すこしも體形に變化を起さないで、そのまゝ、樅の意味になつてゐる。「歡樂」とゆ「言葉」が、鎌倉時代では病氣の意味に用いられたことがあるし、「支配」「最負」などゆ「語」詞わ、古代の意味と、今日の意味とわ、ま、たく違つてゐるが、その體形わ、古代のもの、今日のもの、全様である。「開山」「本山」などゆ「語」詞わ、高野山などで使用すれば適當であるが、本願寺などが使用すれば、その實質を表彰してゐないから、不適當であるが、しかし、かくのごとき例わ、しば「く」見るところである。東京で、子々を意味する「ば「ふら」とゆ「名稱」わ、山陰道で、南瓜

も意味するのである。鹿見島で「あれわ太い奴だ」とゆゝ言葉わ、あれわ肥満して
るとゆゝ意味で、東京で使用するものとわ、大變意味が違ふ。かくの如く、語詞の體
形が、そのまゝで、その實質や意義のまゝ、たく變つた例わ、しばしば見るのである。それ
も名詞などにわあまり烈しいのわないが、助詞になると、それわく、烈しいのがあ
る。その用例の沿革を十分明確に追究しなければ、どしてこゝゆゝ意味になつた
か、ほとんど了解に苦しむものがある。

以上のごとき言語上における一大變化は、歴史上における一大出來事の發生した
結果に原由するものである。たとえば、羅馬の文明が、比較的文明の劣等な人民
に破壊されたときに、羅馬人の言語が、羅馬人の勢力のすでに及ばない地方におい
て、種々の變化を受けて存在していたことがあつたし、ノルマンコンクエストの結果と
して、英語が一大變化を惹き起したこともあつた。これらわ歴史上の一大出來事
が、その國語上に一大變化を惹き起す好例である。新井白石がかれの著わした東
雅のなかに、こゝゆゝことと記している。すなわち、織田、豊臣兩氏が天下の政權を
掌握したときにわ、京都の言葉に尾張方言が澤山交つていた。それが徳川氏の代に

なると、三河方言が京都にだん／＼勢力をえるよゝになつた、とゆゝことを記してい
る。これも面白い事實である。しかしながら、國語に一大變化を惹き起すよゝな
歴史上の一大出來事とゆゝものわ、その頻繁に起るものでない。ちゝくわ、漸進的
の變化であるが、これわも、とも平和な時代においても、つねに發生するものでど
の國語においても、そゝである。たとえば、英語についていへば、沙翁時代の言葉と、
今日の言葉とわ、さほどちゝきな差異がないよゝである。今日でも沙翁の作など
わ、さほどの困難を感じず、讀むことが出来るが、しかし、仔細に調査して見ると、種
々の點において、種々の差異の存在を認める。つまり過去三百年間に、いかに英語
が變化したか、とゆゝ證據を、あきらかに窺ひ知ることが出来る。それで、英語にお
いてわこの時代の間に、左の三點の變化を生じている。

一、語詞の意義の變化したこと、

二、英語において、むかし豊富に存在していた屈折(Inflexion)の消滅したこと、

三、英語中に方言とか俗説とかゆゝ、各種のものも發生したこと、

つぎに我邦の例を取つて見れば、奈良朝と平安朝の間に、國語がいちじる、しく變化し

た。たとえば萬葉集と古今集との手爾遠波の用例を見れば、この間にいかに變化したか、とゆゝことが分る。その他、聲音上にも種々の轉訛が起つてゐるし、動詞の活用などにも種々の變化が起つてゐる。その後、鎌倉、足利、織豊、徳川の各時代を経て國語がますますはげしく變化した。特に封建時代がながく繼續したから、國語が數多の方言に分岐して、いよく統一を失うよゝになつた。今日の口語でわ、九州の方言と東北の方言との間に、一大懸隔を發生してゐるので、ほとんど了解する事が出来なくなつた。それで、言語を決定して一定不變のものでなく、時代と方處とによつて、つねに變化するものであるとわすれて、先哲もしばしば説いてゐる。新井白石の東雅の總論に、よそ天下の言語にわ、古言もあれば、今言もある。その古今の間に、方言がまた存在してゐる。のみならず、方言の中にも、雅言もあれば、俗言もある。現今五方の人々の言語が、たがいに全一でないのみならず、むかしもそれぞれ異つてゐた。それゆゑ、千載の下に生まれて、千載の上に通じ、一方の中に有りて、四方の外に達すること、困難である、とゆゝことが見えてゐるし、谷川士清の和訓彙大綱の中に、わづきのごとき面白い事實が見えてゐる。

言語の古今あるは、日本紀萬葉集の詞、今とよほいに異なり。また、詠歌大概に詞は三代集に出づべからず、といへり。されど古今集の詞といへども、好みよむまじきなりともいへり。口語もまた同じきにや。徒然草に古は車もたげよ、火かいげよ、といひしをもてあげよ、かきあげよ、といふ口をしと書けり。てあ反たきあ反かなれば、緩急の異ながら、古今の雅俗にわたれり。貴賤の詞もまた同じ。よし清少納言も下司の詞には、かならず文字餘したりといへり。謝在杭も、稱謂有質於古而増於今者、陋可知也といへるぞ、げにとよほえ侍る。言語にその方俗あるは、和名抄郷名に、秦原をはいばらともはぎはらともはりはらともはんばらともはばらともよみ、榛名をはらなともよみ、また邑樂はしき邑美あふみ邑知ちほちとよめるをもて知るべし。幽齋九州道記に、あまさかる鄙にはなほぞ居たむなき、

どこも全じ浮世なれども。

九州の方言をよめるなり。また、かうするなといふは、後を制する詞、なぜかうするといふは、今を咎むる詞なるを、上總にてはかうするなといふを、なぜかうする

といふは語脈の異なり。又土佐辭をよめる長曾我部の歌に、

けゑく／＼とちふはわこらがゑずらしや、

ぜじやうしやうちくよんべさたちい。

けゑく／＼はこれく／＼と人を呼ぶなり。ちふはといふなり。わこらは吾子等なり。ゑずらしやはいやに思ふなり。きつゝいことをゑずいといへり。ぜじやうは物體といふ詞世上にや。しやうちくは精盡るにて事に倦むをいふ。よんべは昨夜なり。きたち／＼は來たといふなり。ちい／＼はちふの轉にて、毎々語助につけいふなり。又阿波辭をよめる歌、

うらがくにぎやうに咲たる梅の花、

をやれけうとなゑずるやまかせ。

うらは我なり。ぎやうには仰にて、仰山の略なるべし。やをれは訝る辭けうとなは甚しきをいへり。また難波人の尾張の郷談をよめる狂歌、

かゝてこいさすがおそがいおぞいこと、

はなにあらずにそうてやかかうてや。

かゝてこいはかうて來れなり。さすがは何しにといはんがごとし。おそがいは恐しきをいふ。おぞいことは不好事をいふ。はなには初なり。あらずにはあらざるに、そうてやかかうてやはそらぢやかうぢやの轉語なりとぞ。また若狹の方言童謡に、

よぎやひとんとおしやうすけれどふとつ枕にひたりねて。

といふ。ひとふとをつねに錯言しうとむと分辨せず。伯耆もひとふとを取違へり。東をふがし、懷をひところの類なり。また、豊後辭の歌に

きのふ見ちえきふ見んしひかくいしいに、

二日を見ずはうどうどうしやう。

ちを反てなり。きふはけふなり。みんしひはみぬさへなり。くいしいはくやしきなり。うどうは我をいふ。どうしやうは何としやうなり。また、

おれもわりうおむひはすれどうしやう、

つひにあふえじしんきなんじやう。

わりうは我をなり。おむひは思ひなり。しやうろはしやうぞなり。あふえじは

逢得ぬなり。なんじやうは何とせんなり。また信濃の賤の女が山路の櫻を見
てよめるとか。

いきつしまにつぼみし花のきつちまに。

ぐわらりとさいたさけとちのかば。

いきつちまは往しななり。きつちまは來りしななり。ぐわらりとさいたは蒼
みたる花の快く開くをいふなり。さけとちのかばとはこのあたりの桶は繩を
用ゐず、櫻の皮をもとちたるなり。四國も全じ。また奥州の方言をよめる。
いぐひすや初音ぶんだせきくべいに。

あぜいなかないぶさただんべい。

鶯の初音を出せきくべきになぜ鳴ぬぞぶさたぢやといへる意なり。また琉球
國にて祝賀の初にうたふ歌

けふのふくらしやなにもがなたちよるつぶて

をるはなつゆぎやあたくと。

琉球の歌は春正の傳なりといへり。春正は大納言資慶卿の門人なり。けふの

ふくらしやは今日の福らしきなり。なにもがなたちよるは何に喩へようその
琉語なり。つぶてをるはなのは蒼んで居る花のなり。つゆぎやあたくとは露
に行逢た如くの義、行逢事を常にもゆきやんなどいふとぞ。又蝦夷詞の歌とか
びるしやもとかものもかけをもころして

霞の内にちぼ見えけり。

びるしやは褒たる詞、かものもかけは美女子の体なり。もろこしては熟睡をい
ふ。ちぼは舟なり。又伊勢櫻を伊勢にて御所櫻といひ、江戸櫻を江戸にて吊燈
櫻とよぶの類も、また少からず。よて連歌に
草の名も處かはればかはるなり、

といふ句に、救濟法師

難波のあしも伊勢の濱荻

ところをはつけられたれ。西土にても、山海經に海外西南人以蟲爲蛇、虺爲魚と
いひ、病源候論に、吳音呼藥爲菽といふがごとき、その甚しきものなり。云々。
とある。これらの事情を見ても、言語の變化する状態を知ることが出来る。

以上のごとく、言語がたえず變化するものである。その結果として、おなじ國語の中に諸種の言語が発生して来る。おなじ國語の中に、諸種の言語が発生するとゆゑ、ことわかしくおもしろい人があるかも知れない。しかしながらおなじ日本語の中にも、方言があれば、俗語もある。卑語があれば、訛語もある。それであまり教育のない人々になると、俗語とおもしろく使用しているし、また、發音なども正確でない。すこぶる怪しいものが多い。上流社會の人々になると、かくのごとき缺點が少い。語格が破れたり、發音が訛ったりすることわ少いものである。しかるに、方言とか俗語とかゆゑ、言葉の意味について、今日誤解している人々が多い。すなわち、これらの言葉が、不正鄙俚な言語を、表彰する名稱のよゝに考へている。けれども、これらある程度まで誤解である。現今普通に方言とか、俗語とか、いっている種類の言語が、純粹正雅な言語を、讀むことも、話すことも、出来ない無教育な下流社會の人々が、使用するものよゝに、おもしろくの人々が考へている。現今上流社會に行われてゐる國語の模範たるべき、正確な言語を自由に使用することの出来ない下流社會、また、無教育者の使用する言語が、方言、あるいわ、俗語であるかのよゝに、一般の人々が考

へている。けれども、田舎の方言とか、下流社會の俗語とか、ゆゑ、ものの中に、わ祖先傳來の正雅な言葉が、随分豊富に存在している。これらの言葉が、村落より、むしろ都會においては、やく消滅するものである。現今で、わ田舎の人々が自身で、かくのごとき言葉が創作することもないので、つまり古代において、使用された言語の殘物と見てよかる。これらの言葉が、方言を構成する原素になるものであるけれども、これが不正鄙俚なものとして、落しめることわ出来ない。言語の標準を、その行われてゐる社會の階級によつて、定まるものでない。下流社會に行われてゐる言葉が、上流社會に行われてゐる言葉より、わ不正鄙俚なものとして、一概に断定することわすこぶる危険で、かくのごとく考へるが、ろしく、断定することわなるべく、避けなければならぬ。下流社會に行われてゐる言葉に、わ、破格の語法や、轉訛した發音が、比較的、多量に存在しているの、わ事實である。けれども、上流社會に行われてゐるものにも、決して、絶無とゆゑ、ことわれないので、随分ある場合に、わ豊富に存在していることがある。

つぎに、方言について、わ、こゝ考へている人々がある。すなわち、地方に行かれてい

る言語わその形態や實質のいかにかわらず、すべて方言で都會に行われてい
るもの模範たるべき言語である、とゆゝよゝに考へている人々があるが、しかし
ながらこれも誤解である。言語學上の立脚點からわ、方言の意義を、その解釋し
ない。言語學上から見た方言わ、一地方一區域またわある團體等の一小範圍に行
われてゐる言語を表彰するものである。それゆゑ都會に行われてゐるものでも
地方に行われてゐるものでも、その範圍が狭小であれば、ひとしく方言と稱してい
る。現在の東京語すなわち、將來我邦の標準語にもなるゝとゆゝ、現在の東京語も
もと洗つて見れば、決して純粹正雅な言語の集合したものてわないのである。ま
た現在方言として社會一般から認められてゐる、京都語などわ、我邦の文學上に淺
からざる因縁を有するもので、その形態や實質わあるいわ東京語よりも優てゐる
かも知れない。けれども、その實力わ東京語よりも現在ほるかに劣てゐる。それ
ゆゑ言語の標準わ時代く定まるものであつて、絶對的標準なるものがあらかじ
め存在するものでわ決してないのである。

現在我邦にわ標準語とゆゝものがまだ存在してゐない。現在獨立してゐる無數

の方言も感化して國語も統一するに足るべき有力な標準語がまだ存在してゐな
い。しかしながら、將來標準語の制定された曉にわ、それが普及するにしたがつて、國
語の方言的特質が漸々減少するよゝになる。この方言的特質の減少も、促す動機
として、第一に敷えなければならん、わ交通機關の發達である。鐵道が全國に敷
設され、汽船が全海岸線またわ、河川も航走するよゝになれば、東西の交通南北の往
來が容易になり頻繁になるから、國語上の割據が破壊され、その間にたがいに統一
するのである。第二に印刷術の發達である。この發達のために、方言が段々消滅
して、國語の統一を促すよゝになる。第三に國語教育の發達である。國語教育に
ついて一定の標準語も採用するよゝになれば、家庭の方言も消滅させるよゝにな
る。かくのごとき原因によつて、方言が漸々消滅して、國語の統一も促すものであ
るが、一方から見れば、この方言の消滅とゆゝことわ、學問上でわよほど注意も要す
ることである。今日存在してゐる方言わ、あたかもいまや消滅に飯せんとする稀
少な花卉が、植物學者に種々寄與するところがあるのとよなじく、國語の過去と現
在とも結びあはせる連鎖である。國語の史的發達もあきらかにする、唯一の材料

であるから言語學上すこぶる貴重なるものである。紀錄上にのみ存在している古代の言語わ、あたかも植物標本室に陳列されてある乾燥した標本のごときものであるし、現在口語に活用されている生きた言葉わ植物園に培養されて、その嬋妍を競っている花卉のごときのものである。どちらが研究の標本として適當かわ、ゆゑまでもないこと、いま現に活用されているものの方が適當なのである。それゆゑ、これらの適當な材料が消滅するに任せて、これに對してすこしも言語學的研究を試みないのわ、決して學術に忠なる所以でないのである。

英語にしる、日本語にしる、ある一國語について精密にその分岐の状態を研究すれば、各國語の史的發達に、通有な言語變化の原則等の一斑を、知ることが出来る。それゆゑ、言語學上における一般の原則など、を説明するにわ、一番ファミリアルな國語を取るのが得策である。すなわち、われ／＼日本語によつてこれらの原則を説明して貰つた方が了解し易い。日本語わ平生使い馴れて、日々見聞もしているものであるから、原則そのものも抽象的に説明するよりわ、生きた例證を見聞した方がはやく得心が入つて、かつ、趣味を感ずるのである。それゆゑ、これらの原則について

わ、なるべく日本語の例證で説明し、その補助として英語の例證を列挙しよゝとでも。古代に存在した文法上の形式等のあるものわ、今日でも各地の方言に存在して、その殘影を止めているとがある。たとえば、「雨垂れ」の「垂れ」わ、むかしわ四段に活く例であつたが、今日てわ下二段になっている。けれども、四段の形式わ方言に残っていて、「雨垂り」とゆゑ言葉を作っている。その他、「あそれ」「かくれ」「はなれ」などわ、むかしわいづれも四段の活用であつたが、今日てわ下二段に變つてゐる。けれども、これも今日の方言中に古代の形式を存しているものがあるだろゝと考える。英語てわ複數に *es* またわ *es* を附け加えるのが正格で、*oxen* のごときわ、例外として保存されている。しかるに、すでに標準語にも使用されなくなった *eyne, shoorn* のごとき言葉わ、各地の方言になつて生存しているのである。

つぎに、英語において複數を創作する普通の原則とわすこしく異つたものがある。すなわち、*nice, feet, men* のごときわ、その一例である。これらのものわ、今日てわすでに例外のよゝになつてゐるから、その成立について、あやしくも一人もあるゝが英語の古則を知つていれば、その事實がすぐに分る。われ／＼わ、發音するについて

なるべく困難を避けよ、とするのが、一般の傾向であるから、これがため、一の聲音が他の聲音と同化することがある。これほどの國語にもよくある例で、たとえば發音の性質がよほど違う二個の子音が、たがいに結合するときには、容易に發音することが出来ないから、一方の子音が、一方の子音と同化するのである。foisの複數なるfoisのiは、柔かな聲音で、w剛い聲音であるから、剛柔あい調和しない。それでw發音に困難であるから、剛いfoisも柔かなfoisに變じてfoisとfoisにする。さすればiもzも、ともに柔かな聲音であるから、發音が易くなる。これとちなじ目的で、子音が母音と、一の母音が他の母音と、同化することがある。一の母音が他の母音と同化させる場合に、前にある母音が、後にある母音に、まったく一致しなくとも、やゝ似寄つたものに變化するのが普通である。foet, heanなど、wその好例で、foiが feiとなり、foisに、foisになり、maniiが menniとなり、foisに fennとなり、たのわ、まったく以上のごとき傾向に支配された結果である。

また、英語の動詞における活用について見ても、その變化しているのわ全様で、今日てわ複數を提示する屈折、まったく消滅したけれども、六世紀ごろには、それらのも

のわただしく存在していたのである。もっとも今日でも、正格な屈折が存在しないでもないが、それわ各地方のく異つた形式で存在している。英吉利のごとき一島内においてすら、すてにかくのごときは、なはだしく變化しているのを見れば、大陸における各國語などの變化、一層烈しいことわあきらかである。我邦でも今日口語の活用など、區々である。各地方によつて、その形式も異にしている。いかにその形式も異にしているかといえ、一わ古代における活用も保存し、一わ古代のものも轉訛している。たとえば九州地方で、古代の文語における活用の形式も、そのまゝ、口語にも使用している。下二段、わ下二段に、上二段、わ上二段に活用している。『起くる』『受くる』『出來くる』『任する』といつて、『起くる』『受ける』『出來さる』『任せる』とわいわない。しかるに、關東地方から東北地方など、わ、まったくその反對になつてゐる。もし東京語も我邦の標準語に制定すれば、『起くる』『受くる』『出來くる』『任する』など、例外な破格なものよ、に思われるが、しかしながら、それわ古代における文語の殘影であることも知らなければならぬ。

つぎに物名の異なる點など、お舉げて見ると、その變化の甚しいこと、語法上の形式などの比でない。同名にして異物もあり、異名にして同物もある。たとえば「痘痕」などに對する名稱も列舉すれば、それが實に數十種のおきよきに上るのである。また同一の物名であっても、その發音も各地方によつてそれぞれ異なることもある。左にその一例を舉げて見ると、

- 一、あ韻がお韻に、お韻があ韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-------|-----|--------|------|
| 腋香わきが | ワキゴ | 寡婦やもめ | ヤマメ |
| 身体からだ | カラド | 蠟燭ろうそく | ドーサク |
- 二、あ韻がえ韻に、え韻があ韻に轉ずるもの、

| | | | |
|------|------|-----|-----|
| あれ | オラ | | |
| そんなに | ソソネニ | さげぶ | サカブ |
- 三、あ韻がう韻に、う韻があ韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-----|-----|------|------|
| なんだ | ナンダ | なるほど | ナラホド |
|-----|-----|------|------|
- 四、あ韻がい韻に、い韻があ韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-------|-------|--------|------|
| ございます | ゴザイミス | 子子ぼーぶり | ボーフラ |
|-------|-------|--------|------|

- 五、い韻がお韻に、お韻がい韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-----|----|-------|-----|
| 帯あび | オボ | 田螺たにし | タノシ |
|-----|----|-------|-----|
- 六、い韻がえ韻に、え韻がい韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-----|----|-----|----|
| 犬いぬ | エヌ | 錢ぜに | ゼチ |
| 枝えだ | イダ | 聲こえ | コイ |
- 七、い韻がう韻に、う韻がい韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-----|----|-------|-----|
| 針はり | ハリ | 逃にげる | ヌゲル |
| 樽たる | タリ | 齒抜はぬき | ハニキ |
- 八、う韻がお韻に、お韻がう韻に轉ずるもの、

| | | | |
|---------|------|------|-----|
| 颯うなぎ | オナギ | 昔じかし | モカシ |
| 風呂敷ふるしき | フルシキ | あちる | ウチル |
- 九、う韻がえ韻に、え韻がう韻に轉ずるもの、

| | | | |
|-----|----|-----|-----|
| 糺ぬか | ネカ | かふる | カメル |
|-----|----|-----|-----|

十、え韻が^レお韻に、お韻がえ韻に轉ずるもの、
 榎^ノえのき ヲノキ 泥^ノどろ デロ

十一、短母音が長母音に、長母音が短母音に轉ずるもの、
 高い ターカイ 蛭^ノひる ホール

砂糖さとう サト 學校が^ノこー ガッコ

十二、二重母音が長母音に轉ずるもの、
 大概たいがい テーグー 鏝^ノよろい ヨレイ

交際こーさい コーセー 大根だいこん デーゴ

十三、ちがつに、つがちに轉ずるもの、
 土^ノつち ツツ 地震ぢしん ツスン

鶴^ノつる チャル 綱引つなひき チナヒキ

十四、しがすに、すがしに轉ずるもの、
 梨^ノなし ナス 蛭^ノしじみ スズメ

墨^ノすみ シミ 雀^ノすずめ シジミ

十五、ひがふに、ふがひに轉ずるもの、
 一 フトツ 風呂敷ふるしき ヒロシキ

二 ヒタツ 吹^ク ヒク

十六、しがひに、ひがしに轉ずるもの、
 質^ノ屋しちや ヒチャ 叱^シかる ヒカル

東^ノひがし シガシ 火鉢^ノひばち シバチ

十七、ら行音がだ行音に、だ行音がら行音に轉ずるもの、
 蠟燭^ノろそく ドーソク 輪語^ノろんご ドンゴ

小供^ノこども コロモ 踊^ノおどる オロル

十八、ら行音がた行音に、た行音がら行音に轉ずるもの、
 私^ノわたくし ワラクシ 知^ラらず シタズ

十九、だ行音がざ行音に、ざ行音がだ行音に轉ずるもの、
 斑^ノまだら マザラ 團子^ノだんご ダンゴ

音階 第一章 音階わたえず變化するのであること 二五

雑巾ぞいさん ドーキン 座敷ざしき

二、さ行音がは行音には行音がさ行音に轉ずるもの

先生せんせい ヘンヘー せまい へマイ

蛇へび セビ 糸瓜へちま セチマ

三、な行音がま行音にま行音がな行音に轉ずるもの

蛞蝓なめくぢ マメクヂ 濁酒にごりさけ ミゴリサケ

蒲鉾かまぼこ カナボコ 満ちる ニチル

三、な行音がら行音にら行音がな行音に轉ずるもの

蟹かに ガリ 霞あられ アラネ

鯛べる シナベル

三、清音が濁音に濁音が清音に轉ずるもの

蟹かに ガニ 蜻蛉とんぼ ドンボ

蜂はち バチ 行かない イガナイ

始はじめ ハシメ 麥粉むぎこ ムキコ

三、直音が拗音に拗音が直音に轉ずるもの

鮭さけ シヤケ 石榴ざくろ ジャクロ

大概たいがい タイグロイ 御座る ゴジャル

旅行りょこい ロコイ 観音くんのん カンノン

喧嘩けんか ケンカ

三、直音が促音に促音が直音に轉ずるもの

真白ましろ マハシロ 咳嗽せき セッキ

行って イテ

以上わほんの一例を示したのみである。その他「わたくし」が「ワシ」に「ござりませす」が「ゴス」「ゲス」になるよゝに、聲音の落ちるものや「判」が「ハンコ」に「蟻」が「アリ」に「墓場」が「ハカンバ」になるよゝに、聲音の加わるものもあるし、又東京のある一部に行われている「行ッチャッタ」「喰ッチャッタ」などのよゝに、約まったものもある。それゆゑ各地方の方言を精密に調査して見たなら、全一の名稱に對する發音が種々雑多に變つてゐるだらうし、また全一の名稱に對する發音もその性質も

異にするまでに至らなくとも、その音の高低、強弱、長短等によつて、多少の差異を生ずるよゝなこともあるだろい。とにかく言語の時代により、またその方處によつて種々に變化するものであるの、明白な事實である。人間に生老病死の現象の存在するのと、おなじく言語にもこの現象が存在するので、言語の生命も有するものと、今日一般の學者に認められているのである。

以上のごとく、言語にわ過去において種々の變化が起つたのであるが、現在においても將來においても、これが決して止むことのないのである。しかるにこれらの變化を決して偶然に發生するものでない。その變化にわそれぞれ理由があるの、それについて、學術上からわしくたしかに説明が出来る。なかにわその現象が不明であり、複雑であるので、説明に苦しむものもないが、けれどもそれには、わまたそれだけの理由がある。要するに以上のごとき變化を支配するに、それぞれ一定の原則があるの、これ普通「法則」とゆゑ、言葉を用いてあらわしている。この法則中に、わ自國語にのみ限らず、一般の國語に適用し得ないものも、おしく存在しているの、で、言語學とゆゑ、一箇獨立の科學が成立つわけである。随分

科學の中でも、一定の法則を確定することの困難なものがある。まったく出来なないではないが、すこぶる困難なものがある。それと同じく言語學上にも、やはり困難な部分がある。たとえ、ば語詞の意義のいろ／＼に變化するの、わ、觀念聯合の作用に原づくものであるが、これらの變化を支配する法則、わ、随分複雑で、面倒なものである。なかに、わどの原則が、どの場合に當てはまるのか、不明なものがある。けれども、それでも、それに対する法則を確定することが出来なないこと、わ、ない。種々の語詞における意義の變化を、歴史的に探討して、その變化を支配する法則を確定することが出来る。たとえ、ば一般名稱 (General name) が、特種名稱 (Special name) に變ること、すなわち、『金』が、金屬全體を表彰する一般名稱から、離れて、貨幣を表彰する特種名稱に變つたの、わ、な、に、ゆゑ、であるか。これに反して、特種名稱が、一般名稱に變ると、すなわち、『瀬戸物』が、尾張瀬戸村から、産出する陶器を表彰する特種名稱から、離れて、全國から、産出する陶器全體を表彰する一般名稱に變つたの、わ、何故、であるか。それ、わ、觀念聯合の作用の原則によつて、説明することが出来る。それで、かくのごとくにして、各國語における言語變化の法則を確定すること、わ、あ、な、が、ち、六、か、し

いことでもない。つぎに、それらの法則の一般を簡短に説明しよう。言語をつねにその外形上にある變化を惹き起しつゝあるものである。しかしながら、かくのごとき變化は標準語をひろく採用すればある程度まで減ずることが出来る。聖書の英譯が英吉利の上流社會に採用されたときに、英吉利における方言の變化力がいちじるしく減少したことがある。それとまなじいよに今日我邦において標準語を制定して、すべての側でひろくこれを採用するならば、方言の變化を減じてある程度まで國語の統一を保つことが出来るのである。今日ては、各地方區々の方言を使用して、その依るべき標準語がないから、國語の統一が困難なのである。それで、標準語を制定すれば、方言の變化力を減じて、國語の統一を保つことが出来るよくなるが、しかしながら、これら語詞についてのみゆゝことが出来るので、その發音上のある特質たとえは、アクセントまでも抑揚までも統一することが出来るかとゆゝと、それら六かしい、随分困難である。聖書の英譯もそのうち發音が種々變化した。つまり各語詞の外形を標準語の制定されたときに確定するけれども、その發音もそのうちでもつねに變化する。これらいやしくも社會にその生命

を有ていく以上、事實止む得ないことである。この側の變化はいつの時代でもどの地方でも、決して消滅することはない。それで語詞の外形は從來のまゝでそれに對する發音はつねに變化するから、それがため今日英語綴字法のごとき不規則なものが出来てくるのである。今日の英語綴字法は發音と文字とが精密に一致しないが、けれども上古において、發音とこれとを表彰する文字とを、大體一致していた。勿論上古においても、實際社會において發音されていた母音の數は、母音を表彰する文字よりわたしかに多かつたに相違ないから、これが全然一致していたとわいえないにしても、今日のごとく甚しい懸隔はなかつたに相違ない。一體、全一の文字をいつまでも、全一の聲音を表彰するものとも限らないし、體形の變化は、それを組織している聲音の變化につねに伴うものとも限らない。それゆゑ古語の研究において、わかれ／＼わただその體形ばかりを取ることが出来るので、それがあつた時代には、發音されていたか、わ、知ることが出来ない。しかしながら、特別の歴史のあるものの外、發音と文字とを、ただしく一致していたものと假定し、またわ、あとかかとかさとかゆゝ文字は、今日とまなじよに古代においても發音さ

れていたものと假定して、研究の歩を進めていくのである。けれども、なかにわい
るくの変化が混雑しているから、それらの點によく注意しなければならぬ。
發音の變化について精密に調査して見ると、實にいろくな場合が存在している。
けれども、その變化を惹き起す原因は、大抵全一である。すなわち、根本の原則によ
つて、これに説明することが出来る。その根本の原則とわなにかとゆいと人類に
特有な性質すなわちでさるだけ努力を避けて容易な方に赴くとする傾向であ
る。この傾向は吾人がつねに自覺することはないけれども、いづれの國語におい
ても、人々が自然にできるだけ發音を容易にしよとゆい傾向が存在している。
かくのごとき傾向は種々の方法によりてあらわれて来るものであるが、それにつ
ぎに説明しよう。

一 發音に困難なる聲音は、よびその集團に對して、それよりも容易な聲音は、よ
びその集團を採用し、場合によりて、わ、全然これに脱落することがしばしばあ
る。たとえば、加行音(k)は喉音として破裂音(explosive)であるから、發音にわ
なかく骨が折れる。そこで仙臺以北の地方で、これに加行音でもなければ

ば、チャ行音(ch)でもない、いわばその間のすこぶる不明瞭な發音に變じて、その
困難を避けている。緊急はチンキーとゆい人があると、いつて笑うのであ
るが、しかしながら、よく注意して聞いて見ると、それは決して純粹のkでも、ch
でもない。ただch音の性質はよほど帯びているから、チンキーとゆいよ
に聞こえるのである。また、破裂音のkとpや摩擦音(frictive)のsとfなど、わ
聲音中で比較的骨が折れるものであるから、それでこれに比較的容易な
濁音に變ずるのである。すべて清音は發音に骨が折れるから、比較的樂な
濁音に變ずること、田舎言葉や教育の缺けている人々の言葉に多い。和訓
彙に「田舎言葉に濁音多し、よて世諺にびるばちどんぼろがにがへるといへり」
とあるの、なかく穿った説である。また、ある地方で、わ、良行拗音や良行音
を嫌う傾向があって、これらのもの、わ、全然脱落するか、また、わ、他の聲音に取換
えるよになつてゐる。たとえば、

旅行りこー

ヨコーまたわロコー

五厘どりん

ゴイン

一兩いちりー

イチョー

言語學 第二章 言語のなかに變化するものであること

分らない
ワカンナイ 行かれない
蠟燭ろーそく ドーソク 六月ろくぐつ ドクガツ

のよゝな例で、全然脱落するか、それでは、鼻音に化したり、また、全類の
だ行音(d)に取換えるのである。その他、ク、グ、カ、ガに轉換するのも、
やはり困難を避けて、容易に赴かんとする傾向に、支配されたものである。聲
音の轉換において、この傾向を、この有力なるもので、これによって、發生す
る轉換の實例、わななく、多い。それとも、一つ、わ、聲音、ただしく、發音す
ること、力めないで、善い、加減に、發音する。いわば、他人に、意思、通ずること、が
出來れば、多少、怪しいところ、があつても、構わないと、ゆゑ、よゝな、怠惰、不注意に
原づく、聲音、轉換の、實例、も、なかく、多い。

二 つぎは同化作用 (assimilation) の例である。manni が menni になるの、この
例で、これ、わ、このために、s が全化されたのである。sella が sella になるのも、全
例である。また、一昨年、あとしが、オトトシになるの、わ、あ、が、このために、全化
されて、お、になったのである。この全化作用に、原づく、聲音、轉換の、例も、なかく、

妙く、わ、な、い。

三 つぎに全化作用と、わ、反對な、不全化作用 (dissimilation) と、ゆゑ、もの、がある。
この種類の變化の起るの、わ、全一の、聲音、が、連續して、いる、ときに、ある、い、わ、t、d
の、ご、と、き、全類の、聲音、が、全、よゝな、位置に、ある、ときに、起る、ものである。なぜ
かと、ゆゑ、と、發音器官、が、いく、たび、も、繰返して、全位置で、運動、さ、す、る、こと、は、ち、ち
と、不便、である、から、その、中、の、ある、聲音、を、他の、別種、のもの、に、轉換、すること、がある。
この、好例、わ、羅、甸語の、edit である。この、語、わ、he eats と、ゆゑ、意義、のもの、である
が、この、語、の中、から、i を、取り、去、つ、て、ed と、發音、すること、わ、六、か、しい、から、それ
で、d と、s に、變じて、est と、した、のである。また、國語の、『何々さるる』と、『何々
される』と、變ずるの、わ、つまり、ると、二つ、重ね、る、の、わ、不便、である、から、れる、と、換
えた、のである。しかし、ながら、この、不全化作用の、例、わ、あまり、頻繁、にある、もの
でない。

四 つぎに不確なる調聲 (indistinct articulation) も、言語の變化、を、惹き、起す、原因、で
ある。けれども、これ、わ、一、地方、全體、と、ゆゑ、より、わ、一、個人、に、多い、ものである。

すべて一個人に特有な現象を、その地方の言語全體にわたるほどの影響を及ぼすものでない。随分なかにわが地方全體の人々がきわめて不明瞭な發音をしてゐることもある。これわ奥州地方にわよくあるもので、口の開き方が不十分であつたり、舌の動し方が足らなかつたりするため、その發音がすこぶる不明瞭になる。現在の假名や羅句字でわ、正確に表記することが出來ないよゝなものも、随分多いのである。

以上わ從來の發音よりも、比較的容易な新しい發音の發生する、主な手續である。この外以上のごとき手續と關聯して、各國語に普通に見る變化がある。それわ、ある語詞の體形が滅殺されたときに、これに補充するよゝな傾向のあるとである。たとえ、ある聲音が脱落したときに、その語詞がひやみに滅殺されたよゝに考え、不安の念を生じて、それを補充する。で、この目的に對して、その中の母音を長母音に變ずるのであるが、その一例としてわ、英語に *chausa* が *chose* となり。 *saus* が *sois* となり、國語に「ごうります」が「ゴサース」になつたよゝなものがある。言語の變化したものの實例について、仔細に調査して見ると、あらたに發生した語

形わ、從來のものよりわかならずしも容易に發音されるよゝになつた、とゆゝことわない。なかにわかえて、困難なものになつたものもある。けれども、いづれにしても、新語形わ舊語形よりわ、社會に勢力を得易いものであるが、なぜそゝかといふ理由わ、不明である。これわ、そらく體形の不同を嫌って、秩序均一を好む心的作用に原因するものと考えるが、この種類の變化を惹き起す勢力を類推作用 (analogy) とゆゝのである。なぜ類推とゆゝかといへば、新語形わ舊語形に準じて創作されたものであるからである。それでこの作用によつて創作される手續わ、すこぶる徐々たるものでわあるけれども、しかしながら、なかく有力なものである。國語における古今の差、しばしば類推作用の勢力によつて起ることがある。この作用わ種々の側に活くもので、單一の語詞についてばかりでなく、結合語の上にも措辭の上にも活くものである。我邦の文語の動詞にわ、九種の活用があるが、あたらしく創作される動詞や、外國語から借用されたものなどわ、かならずこの九種活用のどれかにあてはめて、活用するのである。また、アクセントなども、やはりそゝで、他の地方から輸入した言葉わ、すべてその地方固有のものに全化してしも

のに單數の語詞に複數の意味を有する語詞を結合すればよいのである。また人とゆゑ語詞を本形を單數であるけれども複數の意味にも用いられることがある。しかしこの場合にわすべての人間を一團のものとして表彰するのである。しかるに英語でこの目的に對して、*ages* などゆゑ一屈折すなわち單に文法上の職分を盡すに過ぎずして、すでに獨立の意味を失つた形を他の語詞に結合する。これわ支那語と全然言語構造の慣習を異にしている所以である。もとも支那語にも屈折らしいものもないことわないが、印歐語のよゝなものわない。それで支那語のごとき種類のものも單綴語(monosyllabic-isolating language)とゆゑこれわつまりこの國語においていかなる語詞も、獨立の意義を有するからである。一語單綴語の單位となる語詞を、さわめて僅少なので支那語などにおいてわ、わづかに五百ばかりに過ぎないのである。けれども支那語においてわ平上去入によつて、種々の意義を表彰する。すなわち同一の聲音でも平上去入によつて、名詞にも動詞にもなる。かくのごとく平上去入によつて意義の變るとゆゑとわ支那語ばかりに特有なのでなく、英語にもアクセントによつて、いろゝの職分を表彰することがある。

それで、英語にも平上去入の差別があるが、しかしながら、これを確定するに一定の規則があるのでなく、ただ習慣によるだけのことである。とにかく同一の聲音も平上去入によつて、種々の意義に變化するとゆゑ事實だけわ、これを知るに難しとしないのである。同一の聲音が平上去入によつて、種々の意義に變ずることわ、實用上てわさほどの不便わないが、外見上ちよとあやしく感じられる。けれども談話の際にわ十分明瞭に區別し得るので、英語においても、同一の聲音が動詞にも名詞にも形容詞にもなるが、その間にすこしの混雜もないのである。すなわち、

Could you bear (endure) that a man for a hare (mere) hring should bear a heap on his bare back.

にちよつて、bareもbearも發音を同一であるが、音調によつて區別するから、すこしの混雜もない。かくのごとき方法に原く區別わ、支那語においても、とも發達して、るので、つまり僅少な聲音によつて、優に一國語を作り上げる、その特徴を實に驚くべきものである。また、さらに一層驚くべきことわ、この支那語における特徴の、ほとんど數世紀間變化しないことと、進歩わあまりすみやかでないが、もつとも文化

の發達した國民の言語であることとである。以上のごとき支那語や單綴語であるがこの外複綴語 (disyllabic) として、その一部はつねに同一の思想を表彰し、他の一部は、その附屬的のものとして、自由に取捨することの出来るものがある。この種類の言語は、随分豊富に存在するので、その分布の範圍をいへば、中央亞細亞および北海の海岸に散在する漂泊支族、亞細亞の南部、錫蘭、南部印度、西藏、暹羅、マラッカ、および太平洋諸島の住民、南部歐羅巴、および東部歐羅巴におけるマジアル、歐土耳其、亞細亞および東部歐羅巴において、露帝國を組成する支族の言語等である。これらの言語は同一の集團を組成することもなく、地理上の結合の成立することもなく、つまり、各地方に散在しているものである。たとへば、匈牙利の言語は、ヒンランドのものと同じの集團に屬し、土耳其の言語は、キルギスやヤクーツ支族のものと密接なる關係を有するものである。かくのごとく、ちりちりばらばらに分布しているけれども、これらの言語は、その大體の特質において、すべて一致する。その特質とゆゑの各語詞の主要部である語根は、つねに變化しないが、それに附屬する他の綴音が多少變化するとゆゑ、これが大體において一致するのである。それ

で、この綴音は、語詞の變化しない部分すなわち語根に附け加えることも、語根から取り去ることも出来る、とゆゑ、事實によつてこの原則の下に屬する各種の言語は、とりまゝとめて加添語 (agglutinative language) とゆゑ、この種類の言語を使用する支族の大部分は、漂泊しているので、かれらの間に、政治上の結合もなく、文學上の產物もない。立派な文學を所有しない支族の言語は、さうして變化し易く、かつ了解することが六、かしくなり易い。しかし、これらの支族でも交通が頻繁であれば、それはやく了解することが出来るものではない。それで、文法上の職分を表示する綴音の變化は、事實止む得ないことであるが、思想を表彰する主要部に、なるべく變化を許さないことが必要である。この加添語に、Turanian, Sogdian または Dral-akai とゆゑ、よゝな名稱があるが、しかしながら、これらのものが、絶對的に同一の語族に屬するものとゆゑ、ことと確定するだけの根據は、なほ、た薄弱である。印歐語が同一の語族として成立するよゝな根據はない。ただ、言語構造上、における一般の特質だけが、似寄っているだけである。

つぎに加添語が、もし語詞の主要部と (radical part) その附屬部 (formative part) とが、別

々に存在することやめるか、またわ語根中のある文字が脱落するか、またわ語根の最後の聲音と接尾語 (suffix) の最初の聲音とか融合するか、するよゝになれば、主要部と附屬部との區別わ不明に歸してしまふ。こゝゆゝ現象が一般に存在するよゝになれば言語全体の性質が全然一變する。かくのごとく語根と接尾語とが融合してしまえば、その語詞の歴史わまたたく解明することが出来なくなる。加添語てわその語詞の意義を討尋するが、比較的容易であるけれども、以上のごとき場合に於いてわ、それがよほど困難である。それで現今かくのごとき段階に達している國語わ、歐羅巴の諸國語 (バスクとマシアルとを除き、すなわち羅句語、希臘語、獨逸語、佛蘭西語、西班牙語、および、以太利語等である。この種類の言語は普通に屈折語 (Inflectional language) とゆゝ。これは加添語とわ違て、かの附屬部がすでに獨立し、失い、單に文法上の屈折を表示するに過ぎないものとなつた。それで、主要部わただ語根として附屬部なしに存在するのが、その特質である。

以上のごとく、形態上から、言語を Isolating, Agglutinative, Inflectional の三種に分類することが出来るが、しかしながら、支那語にもすべてに加添的になつたものも、屈折的

になつたものもある。また加添語に屬する土耳其語、アラビア語にも、既に屈折的になるものもある。北米土人、および、メキシコの言語やバスクの言語なども、屈折的に赴きつゝある傾があるが、しかしながら、結合語の各成分わ、別々に分離して使用するを得ざる状態にまで進んでいないから、それになお加添語として取り扱われているのである。おなじく加添語に屬するフィンランドの言語にも、名詞が屈折を有しているものがある。これに反して、屈折語として認められている英語の中にも、あたかも支那語に於ける結合語のごときものがある。たとえば、*un-truthful* のごときわその好例で、これわおのゝの成分に分離することが出来る。けれども、これらの成分が、おのゝ獨立の意義を失つて、單に接尾語に過ぎざるものとなること、たとえば、英語の接尾語 *ness* は、性質を表彰する名詞を作り上げる形式に過ぎないものとなつたとゆゝよゝなことわ、つまり時の關係である。それで、一の形式から他の形式に轉移するときに、明瞭な境界線があるものでなく、普通には一方から一方に漸くうつりかわるのである。それゆゑ、どの國語も現在においてわ、これらの *types* の中の、どれかに屬することたるわ、確な事實である。

かくのごとく、今日てわ三種の形態が諸國語に入り交つてゐるが、これが果して段階的に進んで來たものかど一かど一の問題である。今日の歐洲語わ一度單綴語加添語の各段階を經過したものか、あるいわ別に發達したものであるかわ、研究を要することであるが、とにかく段階的に進むものとゆ一ことにわよほど信憑すべき事實があると信ずる。

第三章 屈折語に屬する語族

前章において述べたと一り、形態上から世界の言語を分類すると、單綴語加添語および屈折語の三種になる。それで、今日の言語學上で、わどの語族が、もつともよく研究されてゐるか、とゆ一と、それわ屈折語に屬するものである。この屈折語に屬する語族に、二種あつて、一わセミチック (Semitic) 語とゆ一名稱を有し、一わインドヨーロッパ (Indo-European) 語とゆ一名稱を有してゐる。このインドヨーロッパ、すなわち、印歐語わ十九世紀の初葉になつてから、獨乙の言語學の泰斗、フランツ・ボップ (Franz Bopp)、ヤコブ・グリム (Jacob Grimm)、フリドリヒ・フォン・シラーゲル (Fr. v. Schlegel)、アウグスト・フリドリヒ・ポット (A. Fr. Pott) それから、おなじく、中葉以後にあらわれた新派の言語學者などが、種々の方面から研究した結果、その系統も、歴史も、分布も、もとも明瞭になつてゐるのである。その他の語族わ、まづ研究されないで、わないが、しかしながら、まだ十分に調査が行き届いてゐないから、なほ不明の問題が多い。それで、今日の言語學などわ、まづ印歐語族の研究の上に成立つてゐるとして

すこしも差支がないので、一般言語學に關する學理など、とにかく印歐語研究の結果によつて綜合したものである。また、セミチック語なども比較的精密に研究されているので、つまり屈折語に屬する語族、他のものよりわ研究が一般に行き届いているとゆゑ、ことだけわ、たしかにいえるのである。それゆゑ、この語族の分布の狀態もつぎに簡単に説明しよう。

屈折語に屬するセミチック語、ノア (Noah) の子セム (Sem) の因によつて、しかく名付けられたものである。この語族に屬する言語、わ、今日すでに消滅に歸したアッシリア語、およびバビロニア語、はじめ、ヘブロー語、フェニシア語、アラビア語、およびある種のアビシニア語等である。この中へヘブロー語、およびアラビア語、ジョーヤ、モハメド教に關する記録も有する點において、世界の宗教史に少からざる貢獻も與えるものである。

セミチック語の特質、三重根 (trilateral roots) も有する點にあるので、これが學者の注意も喚起する要點である。この語族、わ、三個の子音より成立する語根も有し、しかして、この語根、わ、文法上いかなる關係も表彰するときに、決して變化しない。そ

れて、文法上の關係、わ、いかにして表彰するかとゆゑ、と、それ、わ、母音の變化によつてある。語根、わ、いかなる場合にも變化しない、とゆゑ、點、わ、加添語に似寄っているが、しかしながら、これを説明すること、わ、困難である。けれども、とにかくこの點、わ、一の注意すべき事柄に屬する。

つぎに、印歐語の分布區域、わ、セミチック語より、わ、はるかに廣大である。この語族に屬する主なる言語、わ、まづ、イギリス、ホルランド、デンマルク、ヂェーマニー、スカンディナウ、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリ、ウラキア、ギリシア、アルバニア、ベルシア、アルメニアにおいて話されているもの、や、ロシアの大部分も占めている。スラブ、ユツク人に話されているもの、それから、印度において話されているもの等である。これらの言語、わ、今こそ、別々に發達しては、なはだしく違つたものである。よゝに、感じられるが、元來、わ、全一の語族から、分岐したのである。これらの各國語、も、産み出した根本の語族、わ、どんなものであつたか、今日で、わ、すでに消滅してしまつたから、分らないが、とにかく、ある種のものが存在していたこと、だけ、わ、比較言語學の發達して來た結果として、疑ひ、わ、べからざる事實になつている。それで、この語族に對して、わ、今

日のところ、インドユーロピアン、インドチャーマニック (Indo-Germanic) アイヤン (Aryan) の三種の名稱が並び行われている。けれどもこれらの名稱わいづれももの長短があつて、適當なものといえない。たとえば、インドユーロピアンとゆゑ名稱わ、これらの言語の分布している地域上から名付けられたものであるが、しかし、あまり適當な名稱とも思われぬ。つぎに、インドチャーマニックを主として獨乙で用いられているが、これもいさゝか不十分な氣味があるし、アイヤンをこの語族全體を網羅する名稱として、不精密な心持がするのみならず、比較言語學の側から、今日でわすてに消滅に歸した言語も明瞭になつて來ているが、これらのもの以上のごとき政治上の地域とわかならずしも一致しないし、それによつて、以上のごとき言語から分岐したものを、使用している地方においても、他の種の語族が強大なる勢力をもつて行われているとゆゑ、こともあるから、それがかたがたあまり適當な名稱とわ考えられぬ。

つぎに、印歐語族に屬する各國語の特質を、すこしく述べて見ると、サンスクリット (Sanskrit) すなわち、古代印度語を、その語根、語尾、語を換えていえば、語詞構造の方法

わ、この語族の他の國語より、たやすく説き明し得るもので、かくのごとき語族の存在を、あきらかに認めるよゝになつたのわ、つまり、この言語の發見された結果である。この言語においても、種々の文學も、人間思想の發達に、一大價値を有する哲學上の著作も存在すること、言語學の側において、重要なものわ、ヴェダ (Vedas) といわ、れわいつごころの作であるか、今日のところまだ不明であるが、しかしながら、他のアイヤン人種の文學上の作物よりも、古代のものに屬すること、疑のない事實である。それで、これわただに言語學上の重要な材料であるのみならず、宗教學の上においても、あなじく貴重なものである。

つぎに、ヘルシア語、すなわち、ヴェンダ (Vendic) 語を、隨分古い歴史を有しているものである。その古代におけるものわ、サンスクリットにおける場合とあなじく、ガータ (Gāthas) と稱する歌什においても、見ることが出来る。この歌什のあらわれた年代不明であるが、とにかく、ヘルシアにおいて、火を拜んだときに出來た古歌であることわ明瞭である。この歌什わその後多少増加されて、ヴェンダウヴェスタ (Zendavesta) とゆゑ名稱で、世に傳つている。この言語の多少變化したものわ、ペヒスタンの岩石や、

イセボリスの荒墟などにおいて、発見されたことがあるし、また、グライアス王、およびザイクセス王などの功業を表彰した記録において、これを見ることも出来る。楔形文字はアッリア人より借用したものであるが、これに元來アッリア人固有のものでなくして、かれらがアカデア人より借用したもので、それとまたペルシア人がアッリア人から陪借したものである。この文字の新しい形状のものも、紀元後三四世紀のころにおいて、ササニアの貨幣に彫刻されている。紀元後一千年頃に出來た、シーナメーとゆー有名なペルシアの叙事詩は、現今のペルシア語とわすこしばかりしか違わない。バルシイとゆー言語によつて綴られている。とにかく、このツェンド語各種々のものにおいて、見ることが出来るが、これが言語學者に重要視されるの、おつまり、サン、スク、リ、ト、も、つと、も、密接な關係を有しているの、で、一方の言語において、解釋しがたい事實も、この方の言語の上から、一條の光明を得ることがあるからである。

以上、屈折語の亞細亞部に屬するものであるが、つぎに歐羅巴部に屬するもの、わとゆーと、まづ第一に來るの、わギリシア語である。この言語の特質は、複雑な母音

組織と比較的に子音に重き置かないところに存在する。つぎに來るの、わラティン語であるが、今日のフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、および今日でわすてに消滅したプロバンス語など、わいづれもこの言語の子孫である。それで、ギリシア語とラティン語とが、すべての側において、いかに重要な價值を有するものかわい、まあ、ためてゆーまでもないことであるが、ことさらにこゝに述べて置きたいこと、わ、古代に於ける國民の知識、および法律の最高度の發達が、この言語において見られるとゆーことである。

つぎに、以上の南歐地方の諸言語と、密接なる類似を有するものとして、認められているケルチック(Keltic)とゆーものがある。これに今日でもウェールスや、アイルランド、スコットランドなどにおいて、使用されているものである。現今普通教育がすすぶる發達しているにも、かゝわらず、ウェールスやスコットランド地方に、イギリス語とあたたく使用することの出來ない人がいるの、わ、實に驚かざるを得ない次第である。ことにウェールスなどで、わ、ウェールス語で新聞を發行している。それで、わかし、のケルチック語、わ、だん、く、消滅に似し、つゝあるが、しかしながら、なほ餘喘をイギリ

スの一地方に保っているのである。學者の説によると、この言語は歐羅巴の他の言語よりかはるかに親密な關係を、ラテン語に有っているとゆゑ、ことであるが、しかし、その證明はまだ不十分である。

つぎに、歐羅巴の北部地方の言語に、わど、ゆゑ、ものがあるか、とゆゑ、と、リスニア (Lithuania) 語、スラボニク (Slavonic) 語などとゆゑ、ものがある。このリスニア語は、ロシア、および、プロシアのバルチック海岸地方に種々の形態で話されているものであるが、これが、言語學者に貴重な材料と與へるとゆゑ、の、わ、近頃まで、き、わ、め、た、だ、い、く、その、屈折を、保持して、いた、こと、である。この言語の動詞における語尾は、驚くべきほど正確であるのみならず、他の歐羅巴の言語で、古代においても、近世においても、例外として、二三の類似のほか、決して、見ることが、出來ないほど、完全なるものである。けれども、ケルチック語を使用する人民と、なじく、この言語を使用する人民は、獨立の國民として活動することが、出來なくなつてしまつた。

つぎに、スラボニク語は、ロシア、ブルガリア、セルビア、および、ボヘミアなどの各地方に行われているが、しかしながら、その形態は、地方によつて多少違ふ。セルビア、

および、ボヘミアに、多少の文學が存在しているが、チチラスラボニクと稱する、古代のブルガリア語は、紀元九世紀のころに、バイブルを翻譯したこともあるので、言語學者に趣味を有たれるものである。

印歐語中も、とても大切なもの、つぎに、述べる、テウトニク (Teutonic) 語であるが、この語族に、種々の國語が、網羅されている。その中の高獨乙語は、八世紀から今日に至るまで、種々に變化しているが、とにかく、南獨乙の標準語となり、全帝國の模範語となつて、いるものである。なぜ、これが、かくのごとく、強大な勢力を得るよゝになつたか、と、ゆゑ、とか、の、有名な、ルーテル (Luther) が、この言語を、以て、バイブルを翻譯したからである。つぎに、スカンディナヴィア (Scandinavia) 語も、この語族に屬するものであるが、これ、わ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、および、氷島等に行われているものである。氷島に、わ、九世紀に、ノルウェー人が、殖民したので、その時にか、これらの言語は、移殖したのである。しかるに、その當時の言語が、あまりは、げ、しい、變化を受け、ないで、今日まで、傳わっているの、わ、一の、注意すべきことである。

テウトニクの三大語族の第一第二を、すでに述べたと、りであるが、その三、わ、低獨

乙語族である。この語族の中でも、最も古い形態はゴシク人の言語で、四世紀のころにバイブルを翻譯したものが多少残っている。けれども、古代のゴシク語を使用するゴシク人の後裔は、今日では絶えてしまった。この語族の中でも、他の言語は今日でもその後継者があるので、古代のフリジアは多少變化してゐるけれども、現にスレスウツクヤ、ホルスタインなどに行われている。また、古代のサクソン語なども、現に使用している地方がある。

以上の三大語族中、スカンディナヴィア語族と、低獨乙語族とを、それらの語詞の形態がよく似ている。随分ある場合に、低獨乙語族として、一の集團に分類されることもある位で、その聲音轉訛の状態など、實によく似寄っている。しかるに、これらのもの、高獨乙語と間違っているが、それらつまり現在の高獨乙語は、古代のものより、わいちぢるしく變じているからである。それで、かくのごとき状態の存在している場合に、初學の人々、これらをつたたく異なもののように誤解するのであるが、それら十分注意しなければならぬことである。たとえ、英語は、チートニク語族であるが、この語族以外の言語が、随分多量に借用されている。ラテン語のごとき、わ、

フランス語、媒介として、なからず混じている。けれども、それにもかゝらず、英語の文法は依然として、むかしのごとく、チートニクの特質を失わない。それで、現今獨乙の模範語となつてゐる高獨乙語は、やはりチートニクに属するものであるから、これと英語とを、よほど密接の關係を有しているよゝに考えられる。こゝゆゑ、ことわ決して、一概に断定することが出来ないものであるが、言語學上の研究結果から見れば、これとかれとを、系統的關係を有するものであること、わすてに公認の事實である。また、英語とも、よほど密接の關係を有するもの、これよりわかえて北

海およびバルチック海の沿岸地方に存在している。以上述べた結果によると、つぎのごとき事實が、あきらかに、されよゝと考へる。世界における各種の言語は、これを使用する人民にならぬ系統的關係をも有たないのに、全一の原則の上に成立つことが出来る。ゆゑ、事實が断定されよゝと考へる。たとえ、いふ述べた屈折語中に、これを使用する人民に、わかならず密接な

系統的關係が存在するか、とゆゑに、決して、わいえない。すなわち、アーヤン人種とセミチック人種とを、ひとしく、屈折語を使用しているのにもかゝらず、血族

上にわすこしも関係がない。それであるから、かくのごとき問題に對しては、言語學者が輕々に容喙すべきものでない。言語學上からわ、アーヤン人種とセミチック人種とを、全一人種であるか、ど、かど、ゆ、問題と解釋することが出來ない。さらに一步進んで、世界の人種が一元より發生したのか、ど、かど、ゆ、問題と、一層解釋し得る望がない。人種の起源問題について、言語學がさほど有力な材料を與えるものでない。なぜそ、かど、ゆ、と、人種の發達と言語の發達とを、別々の逕路を取っているもので、たとえ、人種がある事情によつて、全然消滅してしまつても、その言語が他の社會に依然として存在していることがあるし、その反對にある種の言語が消滅したとき、從來これを使用していた人民、他の言語を使用するものである。それゆゑ、ついに、人種と言語とを、別々に發達するのである。たとえば、現今のイギリス國民中に、ローマ人も、ゲルトン人も、北歐の人種も、たがいに入り雜っているが、しかしながら、それらの人々、わ、の、固有の國語も、しく、わ、方言も、使用してあり、わしないので、みなひとしく共通の言葉も使用している。これわ、わが日本においても、全様で、大和民族といつても、決して全一人種の集團でない。この島に移

住してから後も、支那人も朝鮮人も歸化して來たけれども、國語として行われているもの、全一の體形のものである。また、この國語について見るに、これを組織している個々の語句に、わ、いろ、く、のものがあるのか、ならずしも固有の自國語ばかりでない。日本語の中に支那語から借用したものも、朝鮮語から借用したものもあり、梵語から借用したものもある。けれども、日本語としての特質を、依然として残っているのである。それゆゑ、言語學者は、國語の系統を研究するに、ついで、以上のごとき事情によく注意しなければならぬ。

それから、一つ注意すべきこと、わ、二個の異な國語が、一國に並び行われるとき、生存競争の結果、そのどちらかが勝利を得ることになる。この勝利を得ると、ゆ、ことについて、わ、種々の事情があるが、とにかく、その一般の原則として、わ、文化の發達した人民の使用する言語が、その發達の幼稚な人民の使用する言語を、壓倒して、ついに勝利を得るよ、になるのである。文化の發達の高度なる人民が使用する言語を、つまりその材料もきわめて豊富であるから、その發達の低度なる人民は、その言語から種々の材料を借用する。文化の發達の不平均な國民間に、わ、

以上のごとき成行わさわめて自然のことである。

あわりに越べて置きたいことわ、印歐語わたがいに系統的関係あ有する一大語族であることわ明であるが、しからばこれわいかなる母語から發達して今日のごとき各種のものが分立するよになつたか、とゆゑ問題についてである。今日われが印歐語と稱している語族わ、むかしから現今の地域に行はれてありわしなかつた。リグベータ(Rig Veda)の創作された時代においてわ、印度に侵入したアーヤン人種わ、印度の西北隅に居住していた。また、ギリシアおよびイタリアなどわ、印歐語とわまつた異った言語も、使用していた人種が居住していたが、この人種わ、無論アーヤン人種てわなかつた。それで種々の側から研究して見ると、アーヤン人種がもとも古い時代に居住していた地方わ、中央歐羅巴か、もしくはわ、北部歐羅巴のある地方であつたとゆゑ、ことがやゝ信憑される事實になつて見ると、ヘンリースウィットがいつている。各言語の特質も比較して見ると、これらの諸言語わ、だん／＼に分岐したもので、決して急激に今日のごときものになつたのでない。けれども、後世になつて、人種の移住することが頻繁になつてからわ、随分急激な變化も起つたのである。それ

でケルチック語とラテン語とわすこぶる密接に類似しているが、それに比較すれば、ケルチック語とゲルマニック語との類似わ、さほど密接でない。これとあなじく、バルチック語わ、スラボニック語との類似が、すこぶる密接であるが、ゲルマニック語とわさほどでない。かくのごとき系統的関係も、精密に調査すれば、これらの言語の母語わ、いかなるものであつたかが分るわけである。それで、ヨハン・アデルンクやライプニッツ杯わ、世界における言語の根源わ、ヘブリイにあるとゆゑ、ある學者の説も、否認して、亞細亞に、あつた、とゆゑ、考も有つていた。また、ある學者わ、印歐語の根源わ、梵語にありとし、ツェンド語にありとし、あるいは、ギリシア語にありとし、諸説紛々として、まだ一定しない。しかしながら、今日現在している材料て、わこの母語も、發見することが六かしい。ただ、印歐語族わ、全一の母語から分生したものとゆゑ、ことだけしか明言することが出來ないのである。かくのごとき問題わ、人種の起源も、もしくは、その發達に關するものとわ違うので、言語學の責任も、十分解決が出來るのである。それで、この問題も、解決するのわ、つまり比較言語學の職分である。それから、アーヤン人種が太古において居住していた地方わ、どこであるかとゆゑ、

問題も言語學上から研究することが近來起つて來たのも一の注意すべきことである。この問題についてわ千八百四十五年にクーン (Adalbert Kuhn) の "Zur ältesten Geschichte der Indo-germanischen Völker" とゆゝ著書が公にして印歐人種がまだ分岐しない以前に於いてすでに *lex* のことと思想あるいわ農業・家屋村落等の思想を有していたよりであるから當時すでに遊牧の民でなくして土着していたものである。一とゆゝことと論じ、グリュム (Jacob Grimm) も印歐人種が亞細亞より歐洲に移住して來た當時は遊牧を去ることはなほ遠くなかつたとゆゝことと説いている。つぎにホイートニー (Whitney) も印歐人種が太古に於いて家畜に馬・牛・羊・犬等有し、農産物に小麥・大麥・麻等有し、兵器に劍・弓・矢・楯等有し、船に櫂を備えていた。また氣候に對しては冬の觀念ばかり發達し、社會制度も國家的でなくして家族的であつた。けれども海に對する觀念が、たゞ存立してゐなかつたのを見れば、その原始時代に於いては、はるかに海岸から遠ざかた山間に居住してゐたものである。一とゆゝことと説き、ヘーン (Hehn) も千八百七十年に "Kulturpflanzen und Haustiere in ihrem Übergang von Asien nach Griechenland und Italien" とゆゝ著書が公にして印歐人種が亞細

亞から移轉したとき、また國家的の社會制度も組織しなかつたので、家畜に羊・豚等のほか、馬・山羊・猫・鳥類なく、衣服に羊毛で編製されたものがなく、食物にわづかに乳と蜜とで製した酒があつたのみで、乾酪・牛酪・麥酒・葡萄酒・食鹽等がなく、家屋はことさらに建築せずして、冬は穴居、夏は車、また天幕に寝るよりな有様であり、戰爭に弓・槍・楯を使用し、金・銅・鐵に銅を使用したのみに過ぎなかつた。家族の關係はなほだ薄弱で、病氣にかかっても、別に療養を加えず、ただ死するに任せ、もしなかく死ななければ、これと殺傷し、酋長が死すれば、その妻子・奴婢・家畜等も隨伴させ、婚姻も略奪も専らとし、生殺與奪の權も、父母に存在し、一般の人氣も殺伐にして、すこぶる迷信に富み、數に於いては、まだ千の思想が發達しなかつた。かくのごとき有様であつたから、その當時の文化は、すこぶる幼稚であつたとゆゝことと説いた。かくのごとき、ヘーンも言語學上からも、ばら植物および家畜も研究して、いま述べたような材料を蒐集したのであるが、この研究に於いて、とくにかれの注意した要點を擧げて見ると、第一言語の類似も以て、ただちに事實の類似も斷定することを得ざること、第二言語に其他の國語より借用したものもあまたあるから、その語源も明に

して、自國語であるか、外國語であるか、確めなければ、非常な誤謬に陥る恐があること、第三言語上にその痕跡を存せざる技藝もしくわ、思想も、その時代において、よいに發達したとゆゑ、こともしばしばあるから、單に言語上の事實ばかりで、古代における人文の發達も、明にすることが出來ない、とゆゑ、ことと、この三點であつた。このヘーンの研究に對して、わ、ペンフイ (Theodor Benary) わや、反對の意見を有つて、いたが、しかしながら、かれを破るほどの勢力はなかつた。つぎに、ヘーンのごとき研究方法をもつて進んだの、わ、シラーデル (Schuler) であるが、かれは、千八百八十三年に公にした "Sprachvergleichung und Urgeschichte" において、金屬および武器の名稱、家畜、植物、農業、四季、食物と飲料、衣服、家屋、商賈、印歐人種の人文、および歐洲における戦籍以前の遺物、ことにスウェーデンにおけるもの、家族と社會、宗教、印歐人種の本源地の事項について研究した。

かくのごとく、言語學の上から、印歐人種の本源地を發見しようとする科學的研究、わ、實に十九世紀の中葉から始まつて來た。しかし、その研究の結果、その本源地が、亞細亞のバクトリア (Bactria) 附近にあると主張したる、わ、アドルフビクテである。

かれは、(一) 四季、(二) 岳、嶽、壑、河、(三) 礦物、植物、動物等の研究によつて、バクトリア本源地説を提出したが、つぎにこの説の系統を受け、たの、わ、シライヘル、マクスミューラー、ミスターソン等であつた。しかるに、このバクトリア本源地説は、千八百六十年までも、ばら行われた、有力な學說であつたが、千八百六十二年となつて、ラタムまつこれに不服の意嚮を表明し、ペンフイ、ホイットニー、ガイゲル等、またこれに反對したのである。

ラタムは、印歐人種の本源地が、歐洲にあるとゆゑ、説を唱え、ホイットニーも、千八百六十七年に公にした "Study of Language" において、亞細亞説を反駁し、ペンフイは、千八百六十七年に公にした "印歐語辭書" の序において、歐洲の地質より、その人種を研究するときは、歐洲人は、非常な古代から、すでに存在して、いたので、その本源地は、實に南露にあると論じ、ガイゲルは、樺檜等の植物を研究して、北獨乙論を主張している。

また、千九百年に出版された、スウェーデンの "History of Language" に、わ、現今アーヤン人種の本源地は、中央歐羅巴か、また、わ、北部歐羅巴にあるとゆゑ、説を、一般の學者にやゝ信用されている、とゆゑ、ことが見えている。

かくのごとく、印歐人種の本源地説は、區々で、まだ一定する運に至らないが、とにかく

くこの問題を解決するについてわれわれの注意すべきことが數點あるのである
それら舉げて見ると

第一言語わ人種の古代における人文の發達を明にするについてわもとも有力な
材料を供給するものであるがしかしながら獨立にある斷案を下し難いものであ
るとゆゑ、ことわ決して忘れてわならん。一昨肥録上もしくわ實際の口語上に存
在する古代の言語わその當時において存在したもののわづかに一部分に過ぎな
いことわゆゑ、までもない。また、そればかりでなく、以上のごとき方便によつて後世
に傳つた言語も繼傳の際種々に變化したので容易に原意義を探ぐることの出來な
いのもあるし、また、それぞれの事情のため、すでに消滅に歸したのもある。それ
ゆゑ、古代において實際社會に存在した言語のわづかに一部分だけが今日われわ
れの手許に存在していることになるのであるから、これだけの材料によつて、その當
時の文化も十分遺憾なく開發することわ六かしいのである。それで、人種の本
源地、人種の行動乃至わ各國語間の系統的關係を判定するにわよほど精密に研究に
研究を重ねることが必要なので、みだりに獨斷的の解釋を下すことわ避けなけれ

ばならん。

つぎにこの研究についても、とも注意すべきことわ、その材料に供せられる古語わ
はたしてその社會において發生したものか、あるいは他の社會から借用したもの
か、明にすることである。そもく世界における人種わいかなるものでも、かな
らずたがいに接觸するものであるから、その結果として、かれらの言語上に種々の
混和を惹き起すのわ、自然の現象である。それゆゑ、いかなる人種といえども、個
の社會に發生した言語ばかりで、その國語を組織し、すこしも他國語の原素を混和
していないことわ決してないのである。この混和のことにいちぢるしいのわ英
語および日本語である。英語にわローマンス語族の原素を始として、その他の國
語の原素が、澤山に混和しているの、この外國語の要素わ、七分の五の多きによつて
いるほどである。また、日本語わその古代において、支那文藝および佛敎傳來等の
影響を受けたので、直接にあるひわ間接に梵漢兩語を、きわめて豊富に輸入してい
るし、また、近來泰西の文物渡來の結果として、その言語が漸次日も追つて輸入されつ
つある状態になっている。かくのごとく、いかなる人民も他の人民と接觸する以上

わ、その言語もまた、純粹の状態に保つとゆゑ、ことに實に六かしいので、ほとんど不可能のことに屬するのである。それで、シラーデルの研究においても、この點について、わたくしに注意を促している。

以上に述べ来たように、國語にわいかなるものでも、多少の混和物、すなわち、借用語 (Loan words) も存しないものはないのであるから、言語學上から、以上のごとき問題も解決するにあたり、研究の第一着手として、その材料たる語詞の淵源、すなわち、語源を明にし、それが自國語であるか、他國語であるか、もし、他國語であるとすれば、それわいかなる人種の國語であるか、明にし、つぎに、その語詞の形態および意義を、歴史的に研究し、その結果によつて、ただちにある事實を確定することも出来ようし、説明することも出来よう。また、ある場合に、他の國語と比較研究した後に、以上の手續に及ぶこともある。とにかく、以上のごとき手續を経た上でなければ、人種の本源地問題にある偉大なる貢獻を呈することや、各言語間の系統的關係を説明することなど、出来ないのである。

第三、語詞の形態について、すなわち、語詞の構造や、その聲音の轉訛について存在す

る、一定の原則がある、この状態を研究しなければならぬ。すべて言語の時と處とによつて、つねに變化するもので、純粹に古代の形態を保つよゝなことも稀である。これらの原則や状態を明にしなければ、比較的研究も安全に遂行することが出来ない。たとえば、梵語の *lohas* とラテン語の *loans* とのごとき、ギリシア語の *bolos* と英語の *whole* とのごとき、宛然全一語のよゝに見えるが、しかしながら、なんらの關係もなす。また、英語の *bishop* と佛語の *Evêque*、英語の *eye* と獨語の *auge* と、まったく別異の言葉のよゝであるが、實に全一の根源から發生したものである。それゆゑ、言語の比較的研究において、以上のごとき原則を、あらかじめ精密に研究して置かなければならぬ。

あ、わりに注意すべきこと、語詞の意義の沿革と、文法上の規則および形式とを研究することである。これら言語の比較的研究に、わ、も、とも重要なこととして、この點が明にされなければ、前に述べた目的を、ほとんど達せられないのである。しかしながら、この研究は、随分困難なことで、ことに語詞の原始的意義を開發することが、至難のことに屬するのである。なぜかとゆゑ、意義の變化を、すこぶる複雑なるも

のであるし、その變化の徑路において、しばしばその連鎖たるべきものが消滅することがある。それゆゑある語詞の原始的の意義をトレースすることゝなかく容易のことでない。また、文法上の規則や形式も、やはりその通で、その沿革をくわしくトレースすることが困難である。

以上に述べて来た四條の注意を、言語の系統的關係および史的發達をあきらかに解決するについて、わとも必要な條項で、言語學者がかならず心得ておかなければならんことである。

第四章 語彙構成の状態について

インドユーロピアン語において、語彙の構成される状態について、これから詳しく述べて見よとともうが、一躰この語族は、上古において、大抵屈折的形式を具備して、総合的言語 (synthetical language) に属していた。しかるに、それがだんく變化する、後世になつて、すでに述べたとり分析的言語 (analytical language) になつた。それで、上古において、その語詞は數種の原素から成立して、その各原素は、その獨立に使用されることが出来ない状態にあり、かつたのである。その構造について、わなかく容易にその真相が會得することが出来ないものが多いけれども、これを分解して研究するかも知しくは、この語族に属する諸言語中に存在する種々の形式を、たがいに比較して研究するかすれば、これを了解することが、あながち困難でないのである。印歐語にもその原始時代において、接尾語 (suffix) と稱する一形式があつて、これが思想を、おもに表彰する他の形式に附隨して、種々の關係を指示していた。この思想を表彰する形式を、な わ ち 語根 (root) と稱するもので

知識を有していなかったのである。それでわれ／＼この語詞の成立している状態を分析的に研究して見るに、われ／＼が古に遡つて尋繹し得る根本的の形式を語根なので、その以上に遡ることが今日のところでは、まづ出来ないのである。この語根を語詞の基本になっているもので、すこしも増減や變化を許さないものであるが、しかしながら、われ／＼の祖先の時代において、決してそういうことなかった。原始時代において、この語根が一般の意義を表彰していたので、増減變化を自由であつた。Derive という動詞から、その意義に關聯した derivation derivative derivable の如き語詞を創作することが出来るとなじく、この語根からそれに關聯した幾多の新語を創作することが出来るのである。それで、語詞の歴史を研究して見れば、それがあきらかに分るものもあるし、また分らないものもある。ある語根がよく發達して、それから種々の新語を産み出して、いるものもあり、それがさわめて乏しいものもある。ことに今日から見れば、古代の材料がすべてに消滅し去つたため、容易にその發達を知る事が出来ないものもある。とにかく、時の古今を問はず、地の東西を論ぜず、その言語の發達上に、榮枯盛衰の現象をかならず存在していたの

であるから、いかなる國語といえども、それぞれ特殊の歴史を所有しているのである。それでその歴史を探究して見れば、印歐語のごとき、わが今日でこそ種々の差異を存しているが、遡つて古代になれば、全一の根源に歸するのである。けれども、その根本的な言語の語根を人類言語の基本でわかない。換言すれば、印歐語の語根を世界における言語の基本でわないのである。それで、たとい語根を探りえたと、しても、それ、わが全族の言語であるや否や、を判定する標準となるのみで、以上のごとき結論を惹き出すこと、出来ない。つまり、言語の種類が異れば、したがつてその語根も異なるものであるから、これを混同すること、わざと、まて、も避けなければならぬ。つぎに、すべての語根をかならずある動作を表彰するもので、その動作を動詞によつて表彰することも出来るものである。しかるに、この語根から、事物の性質を表彰する名詞を構成することが出来るので、たとえ「泳ぐ」という動詞 swim または、swim から、船という名詞 ship または、ship を構成することが出来るのである。けれども、いつでもこの語根によつて名詞の組立を解くことが出来ない。ただ名詞を構成する一般の原則を、ある性質を表彰するという目的にあることだけ、わ疑のないことであ

る。それですべてこの類例によって説明の出来ないものや、代名詞それから副詞および接續詞のあるものであるが、これらのものや、フーバルルートとわあまり関係がない。それゆゑ、これらのものや、特別に論ずる必要があるもので、この側の語根および上のものと區別して、プロノミナルルートと呼ぶことゝなっている。

以上に述べたよゝな方法によつて、印歐語の名詞が構成されているのであるが、しかしながら、また他の方法によつて、構成されることもある。それや語基に語尾を附加するのではなくして、語基と語基とが、たがいに結合して、一の名詞を創作することである。つまり、これや二個の思想を結び合せて、一の新語を創作するのであるが、英語などのごとく、格語尾のすてに消滅した國語において、この語基と名詞との差異や、ほとんどないのである。それで、この結合によつて種々の名詞が創作されるのであるが、その際語基がかならずしも二個とわ限らないので、中にわ三個以上の者もあるし、また第二の語基や獨立の價值を消失して、第一の語基に聯合せんとしているものもある。けれども、この場合において、第二の語基やまだ接尾語に化し了らずして、幾分の原形原意を保存しているのである。たとえば、ラテン語の *caeli*

cola = "heaven-dweller" とよゝ語の *cola* や語根 *col* と接尾語 *a* とより構成されているから *caelicola* やつゝまり結合語である。それで、この結合語の措辭的關係を説明すれば、その一成分が格を示していることがあるので、たとえば「金時計」といへば「金の時計」ということや、*genitive case* を示し、「島人」といへば「島に住む人」ということや、*locative case* を示すのである。これらの關係や、印歐語でわゝく格尾語で示し、日本語のよゝな語族でわ、手爾遠波で示すのであるが、結合語において、これらの原素が除かれていることが多い。ことに英語などになると、この結合語を構成している二成分が、たがいに融合して、原形を容易に認知することが出来ないよゝなものが多い。たとえば、*nostril* や *nose*、*uhiri* との二成分から、*orchard* や *ort* と *gard* との二成分から成立つものであるが、今でわ原意原形が多少違つている。又、第一の語基すなわち成分が、第二の語基すなわち成分に對して、措辭上形容詞の職分を盡しているものもある。「善人」「悪婦」などや、その一例である。これらの成分や、ちのゝ獨立の思想を所有しているものであるが、ただその間における措辭的關係が違つるのである。また、結合語のあるものや、接尾語がその一成分を構成しているものもある。Data-

footed の ed のこととわ、その類例である。日本語にわ助動詞がしばしばこの二成分であることがあるので、たとえば「捕はれ」「見せしめ」「懲らしめ」「食はせ物」などの類わその好例である。かくのごとく結合語にわいろくの種類があるが、とにかく屈折語において第一の成分が格を提示するということとわ決して珍しいことではないのである。

つぎに、印歐語にわ結合語が二成分より成立しているがそれより以上の成分によって成立、場合には接尾語が付け加えられるのである。light-heart, light-heart-ed, light-heart-ed-ness のごとく、接尾語が付け加えられるのである。それで種々の新語を、語基に構成的接尾語を付け加えるのと、語基と語基とを結合することの二の方法によって創作されるが、この二種の性質を、印歐語にわわまづ大差がない。この二種の方法によって創作された新語を、その性質にわわほど差異のあるものでないこととわ英語によって十分證明することが出来るので、たとえば、*god-like* という接尾語を、名詞を *god-like*, *man-like* のごとく形容詞に、形容詞を *truthful*, *truthfully* のごとく副詞に轉ずる性質を有している。それとわの語源を探究して見るに、これ

古代にわわ *like* とわ *so* のため、今日の *like* とわなじ言葉である。この *like* によって *god-like*, *man-like* のごとく種々の結合語を創作することが出来るが、しかしながら、この語詞と *godly*, *manly* とわ、多少意味が違ふ。Odysseus を *godlike* であるが、*godly* とわ考えられない、というより、むしろその意義が違っている。これらの事實から見れば、結合語 (composition) と分出語 (derivation) との二方法を概して、あきらかに區別することが出来ない場合が多い。つまり結合語の二成分がだんご、その獨立を失って一定の意義を所有せざる接尾語という一形式に化してしまつたので、結合語と分出語との間に一定の區別線を定めることが出来ない場合が多いのである。次に今日われわれが使用している接尾語を一定の意義を所有せざるもので、ただ語法上にあける、ある職分を提示するに過ぎないものであるが、しかしながら、これらのものもある時代において、わだしかに一個獨立の語詞であつたこととわ決して説明に困難でない。換言すれば、今日の分出語を、ある時代において、わだしかに結合語であつたこととわ説明にさほど困難を感じない。たとえば *wisdom*, *earldom* の *dom* を古代にわわ正義という意味を有していた *dom* とわ一語である。これとわ單獨に

と接觸した場合とこの二種ある。それで甲方言を使用する人々が乙方言を使用する社會に移住するかあるいわそれを使用する人々と接觸する場合にわかれらの間に種々の混和を生ずるわけである。すなわちたがいにかれらの言語上の材料を借用し合うから、甲方言にも乙方言における種々の材料を混和し、乙方言にも甲方言における種々の材料を混和するよゝになるのである。古代において、日本語に種々の漢語や朝鮮語を輸入したのわつまりこの個人間の接觸に原ついたものである。古代においてわが邦が支那朝鮮よりもはるかに文化發達の程度が劣っていたのみならず、かの地方から尠からざる歸化人がわが邦に渡來したから、その結果かれらの言語も豊富に借用するよゝになったのである。この歸化人や移住民のために言語上に種々の混和を惹き起した例證を米國において、すこぶる豊富に見ることが出来るのである。

個人間の接觸に原由する混和よりもはるかにラージスケールであるのわ、國民と國民もしくわ、社會と社會との接觸によつて起る場合である。たとえばゴールのローマ征服とか、ラチン人種がケルチック人種を征服した場合などに起つた混

和わきわめて激烈なものである。かくのごとく、人種の勢力に非常な懸隔のある場合もしくわ、知識上工業上商買上などに多大の相違のある場合などにわ、その混和わきわめて激烈であるが、ただしこの場合にわこの勢力の優れているものの言語わその劣っているものの言語を壓倒するよゝになる。そしてこの間の勢力に廣大なる懸隔の存在する場合にわ、處々相並び立つとが出来ないから、一方始終に一方のため壓倒されて、その獨立を失うよゝになるものである。ケルチック人種がラチン人種に征服された時に起つた現象わ、その好例である。又大阪市わ今日その商業上に於て、殆ど關西に覇たらんとしているが、それと境を近くしている京都市や神戸市杯が、近來その言語上の影響を受けているとわ、實に著大なものである。

すでに述べたとゝり個人間の接觸及び國民もしくわ社會と他のものとの接觸によつて、言語上に種々の混和が発生するものであるが、この接觸がなぜ言語の混和を惹き起すかというに、それわそれだけの必要に應ずるもので、たとえは、ある國民がある新思想新事實もしくわ新事物を表彰するのに、適當な語彙を所有しないので、その必要を感じつゝある場合に、ある國民と接觸して、その國語に適當なるものが存

在するのを認知するときわただちにこれを借用する。また外國の地名人名ある
 いわ、特種の産物などの名稱を、とくに創作すべきものでないから、これらもそのま
 またちに借用する。これについて注意すべきことわ、外國の産物に對する名稱
 を借用するのわ、かならずしもこの文化發達の程度に關係するものでなく、これら
 のものわ、野蠻人種よりしばしば借用するもので calico, olintz, rice, sugar わ印度か
 chess, orange, shawl わペルシアから, gingham わシマツから, tea wan keen わ支那から
 bantam わバタビヤから, cocoa, potato tobacco わ米土人から、英人が借用したのなどわ、そ
 の好例である。けれども、工藝上科學上宗教上、またわ、政治上の術語などは、かなら
 ず文化の進んだ國民から借用するものである。これらのものわ、もとより必要上
 止むなく借用するのであるが、それほどの必要もないのに、種々の材料を借用する
 とがしばしばあるが、これわつまり一時の流行とか、社會の好尚とかいう原因によ
 るもので、これもなか／＼勢力のあるものである。又ある外國語を學習して、それ
 を完全に自國語に翻譯するものが出來ないので、原語のまゝ／＼使用するよか
 あるが、その結果それらのものも、そのまゝ借用するよ／＼なともあるのである。

かくのごとく、種々の原因によつていかなる國語も、外國語を借用するよ／＼になるも
 のであるが、これを借用するのに、原形のまゝて借用するものとばかり限らない。
 多少自國語の習慣によつてこれを變化するものがある。漢語おわが邦に輸入したと
 きに、漢語の發音と、日本語の發音との間に、種々の不一致があつたので、その一致しな
 い點を、日本語の習慣によつてことごとく改正修飾した。たとえば、日本語にわ、拗音
 促音撥ねる音は行音および、連聲にあらざる濁音等わ、古代においてほとんど存在
 しなかつたから、漢語ににおける以上のごとき聲音わ、日本語の習慣によつて、大抵改めた
 のである。また、佛語が英語に借用されたる當時わ、やはり佛語のアクセントを存
 していたが、後にわだん／＼變化した。かくのごとく、借用語の發音わ、原形のまゝ
 なことわ、ほとんどないので、お／＼く借用した國語の習慣によつて、修飾されるもの
 である。けれども、この場合に自國語の發音も、借用語から種々の影響を受けるも
 のである。古代において、日本語に存在しなかつた發音が後世に數多存在するよ
 になつたのわ、つまり漢語ににおける發音の影響を、受けた結果に外ならないのである。
 つぎに、また借用した言葉も、自國語ににおける語法上特種の法式に當てはめて用い

ることがある。漢語の『裝束』『料理』『彩色』など、わが邦において四段活に活用せしめたのなど、その好例である。またある場合に、外國語の熟語すなわち思想を表彰する特種の形式を輸入することがある。たとえば、南西部のドイツ人、フランス語における法式に従って『よい天氣』というのを *es macht gut wetter* とする。今日の日本語などにも、漢文また西洋文などの熟語のいいあらわした方が、よく存在している。つきにある國語の措辭上の形式が、そのまゝ輸入されることがあるが、ローマンス語族に屬するフランス語が、ゲルチック語の措辭法に種々の影響を蒙っているのなど、その一例である。

以上のごとく、國語にわいかなるものにも、種々の混和を存しているものであるが、この現象を方言中においても、おなじよゝに存在している。すなわち種々の語彙を借用すること、發音がたがいに影響を受けることなど、ほぼ同一であるから、別に説明する必要をなかるゝと考ふる。

第五章 語詞の成立について

前章において、名詞や動詞を構成する語基の構造について、大略説明したのである。で、これらの語基は、印歐語の上古における發達の段階において、すなわち綜合的であつた時代において、また、一個の語詞として、獨立に使用されなかつたので、この時代において、一の語基と他の語基との間における關係を提示する、一の形式が存在していたのであつた。この形式とわいかなるものであつたかといふに、それ、屈折的接尾語 (Inflectional suffixes) と稱するもので、この形式の存在していたがために、印歐語が、い、わ、ゆる、屈折語 (Inflectional language) というものに附屬しているわけである。それゆゑ、この屈折的接尾語は、單に英語において、重大なる價值を有しているのみならず、サンスクリット語、ラチン語、ギリシア語のごとき、國語においても、やはり全様なわけである。この接尾語は、かくのごとき次第のものであるから、つきに、すこしくわしく、これを説明しよう。

この接尾語の發達を説明する材料として、まづ名詞を以つて見るに、これに格接尾

●語 (case-suffixes) と稱するものがある。これを語基に付け加えれば、この語基が表彰している人また物物が文章上いかなる關係において存在するかを提示するに至るものである。たとえば、ギリシア語において、oiko-『家』という語基が、その付け加えられた接尾語によつて、つぎの如く、各々の各種の關係を表彰する。

- Oiko-s the house stands
- Oiko-n he builds a house
- Oiko-i in a house
- Oiko-then from a house
- Oiko-n of a house
- Oiko-i inclination towards a house

かくのごとき種類のものも、随分澤山存在しているが、なほ人稱的接尾語 (personal suffixes) のものも、普通なる形式を取つて見ると、つぎのごときものがある。

| | 單 數 | 複 數 |
|--|-----|-----|
|--|-----|-----|

| | | |
|------|----------------|--------------|
| 第一人稱 | —mi = I..... | —mas = we. |
| 第二人稱 | —si = thou.... | —tas = ye. |
| 第三人稱 | —ti = he..... | —nti = they. |

しかるに、この人稱的接尾語と語根 (da(to give)) 語基 dada とによりて構成された左のごとき語詞が、印歐語中に存在してゐる。

- dada-mi = I give dada-mas = we give
- dada-si = thou givest dada-tas = ye give
- dada-ti = he gives dada-nti = they give

以上のごとき語詞に於いて、その單數の接尾語 mi, si, ti, わ等の I, thou, he との意味が古代に於いてすなわち、これが動詞に附着しない以前において、有つていたことが、この格の性質から知ることが出来る。かくのごとき代名詞と動詞とがいに結合した一の形式の存在してゐたこと、ある程度まで信ずることが出来る。これにて、この mi や ti や w 個々別々に用ひられるとき、代名詞にわならないの、現在

ないから、それゆえ、*ko*が脱落したのである。けれども、英語と全系の國語において、*wa*がすべて、*yo*から分出しているのである。であるから、主格にのみ新語を生ずるよゝになつたのわ、主格と目的格との區別、ことに第一人稱の代名詞において必要なこの區別が、あきらかに認知されるよゝになつた時代においてである。とにかく、人稱的接尾語を作成するために、*yo*を用いたのわ種々の形式を使用するため、以上のごとき區別の必要なことを感じない時代においてであつたので、この時代にわ主格に *ego, ik, I* のごとき新語が成立しなかつたのである。

單數の人稱的接尾語の發達は、以上のとゞり、茫漠としたものであるが、さらにその複數のもの、*wa* と *yo* かと、これに、これもやはり全様である。あまり立派な説明が來ないのである。ただその形から見ても、單數の類例から見ても、この *mas, tas, ni, wa, ye, yo, they* を表彰していることだけわ分る。これで、*mas wa ma + tva = I and thou* と *ma ni ji* の、*matva wa matvi* という形を経て、*mas, tas* (Veda) にある *masi* という形に變つたろゝとゆゝことに説明されている。これと *mas* になじく、*kas* も *thou and thou* という形形である。と、説明が出来るけれども、はたして正鵠を失しないものかど

「か、そこを保證が出来ないということであるし、ことに第三人稱になると、その發達が一層不明瞭であるということである。

以上のごとき形形の古いもの、*wa*、*sanskrit* に殘存しているし、それにまた、*yo* ほど近いもの、*ラテン語* に殘存している。英語にわこれらの古い形式が規則的に正確に殘存していない、ただその一部分だけが殘っているし、純粹な *チーニク語* の形式 *wa*、*yo*、*sanskrit* 語の上に存在しているのである。

つぎに動詞、*wa*、*英語* などにおいて、*wa*、過去、現在、未來の時、*yo*、表彰する職能を有するものとして、*yo*、*ichijirushi* のものである。それで、現在を表彰するに *wa, es, ti = he is* のごとく、單純なる語根に、人稱的接尾語を附け加へて、その目的を達するのである。動作が切斷しないで、連続している場合に、この連続的の動作、*yo*、疊語 (reduplication) によつて表彰することがある。たとへば英語で、*I am living* という思想が、ギリシア語で *di-do-mi* という形式で表彰する。かくのごとき疊語 *wa*、*チーニク語* 族において *wa*、*yo*、*sanskrit* 語に存在している。それで、動作の連続なども疊語で表彰する法式 *wa*、古代において存在していたので、この形式 *wa* ことに「立つ」「行く」「興ふ」

「飲む」のごときも、とも普通なる言葉に存在しているのである。これわひとり
 歐洲の國語においてのみならず、亞細亞の國語においても、ひとしく存在している。
 この疊語の形式わ、サンスクリットにおいてわ、も、とも重要なもので、動作の連続
 またわ、動作の希望等を表彰するに用いられ、ギリシア、ラティン兩語においてわ、使
 役の動作を表彰するに用いられる。また母音の變化によつて、現在の時ち表
 彰することがあつて、ギリシア語に語根 $\sigma\tau\epsilon\iota\omega$ から脱化した $\sigma\tau\epsilon\iota\upsilon\omega$ という語があるが
 これわ *I am leaving* という意義であるし、ゴシック語に語根 $\sigma\tau\epsilon\iota\omega$ から脱化した $\sigma\tau\epsilon\iota\upsilon\omega$
 という語があるが、これわ *I am slipping* という意義である。それらが、語根と人稱的
 接尾語との間に、*na, lu, ta, ya* 等の接尾語ち挿入して、現在ち表彰することもあるが
 これわギリシア語やラティン語に、普通にある類例である。以上のごとく現在ち
 表彰する語基に種々の形式があるが、かくのごとく種々の形式ち發生するよゝに
 なつた原因わ、つまり切斷的と連續的との動作ち區別するにあつたらゝというこ
 とである。

つぎに、過去の時わ、英語の祖先たる言語においてわ、母音の變化と疊語と二の方法
 によつて表彰されている。サンスクリット、ツェンド、ギリシア、ラティン等の諸國
 語においても、過去の時わ、この疊語によつて表彰されるが、過去ち表彰するのに、疊
 語以外の形式ち有せざるチーニク語においてわ、ことにこの疊語ち用いて
 いるのである。かくのごとく疊語わ、現在の場合に於いてのごとく、連續的もしくは
 わ、再返的の動作、またわ、動作に對する希望等が表彰するに用いられるのみならず、
 過去の動作と過去において完了したる動作ち表彰するのにも用いられるもの
 である。けれども、過去ち表彰する疊語わ、その意義においてわ、實際現在と異なるこ
 とがないので、*I have come* と *I am come* とわ、その意味が全一である。それゆゑ、かくの
 ごとき過去わ、完了動作の現在といつてよろしいのである。それゆゑ、かくの
 以上に述べて來たのわ、いづれも單純の時 (simple tense)、すなわち、語根と接尾語と
 によつて作成されたものであるが、この間に以上の二要素ち結合する、母音の存在
 することもあるのである。しかるに複合の時 (compound tense) になると、語根と人
 稱的語尾との間に構成的接尾語 (formative suffix) ち挿入してあるのである。それ
 て、單純の時にせよ、複合の時にせよ、これらの形式わ、いづれも祖先たる母語の、未だ

ために接尾語を附加えていたのである。けれども中性名詞の目的格がある場合に、接尾語を附加えずして語基のみにてその意を表彰することもある。男性名詞および女性名詞の主格、接尾語を附加するのであるが、しかし普通にこれに附加せず、語基の種々の形式によってこれを表彰していた。また中性名詞の主格、目的格の者も同様のものであったのである。これに主語と目的語との區別を表彰するために、格接尾語を別に古代において用いられなかったので、つまり古代において、ただ語詞の配列順序や文章上の意義によってこの關係があらかになつていたのである。一、*セン*の性、自然の區別に原いたものでなく、女性名詞のごとき、語尾のなじからざるものすなわち特殊の語基における名詞の一種類と見て差支ないものであるし、男性および中性、同一の語基から作成されたもので、主格と複数の主格および目的格とにおいて異なるほか、すべての形式が全一である。

ノミナチーザとアクサチーザとの原義を、いまあらかに説明することが出来ないが、しかしながら、サブジエクトとオブジエクトとの思想を表彰せんがために、使用せられたものであること、疑問のない事實である。それで、ある場合に、*subjective case* と *objective case* というよりに命名せられることもある。けれども、これら他の格から區別するための名稱として、むしろ、いかにも知れないが、この二格の關係を區別するものとして、不適當である。なぜかというに、*monstrum incolitanum* におけるごとく、主語においても、目的語においても用いられることがあるからである。それらの問題、いまながら論じないが、とにかく、この主格と目的格と、それから、呼格 (*vocative case*) と、わその發達、が、とも、古いものであるの、わづきのごとき、理由によって、確實らしいのである。

一、この三種の格、その存在を必要とする問題から見れば、その存在の必要が、も、とも、切なものである。

二、この三種の格、印歐語において、すべて共通して存在している。けれども、他の格、ある國語に、存在し、ある國語に、存在しない。

三、この三種の格、その外形上、他の格と入りかわることがない。

でもなく、ラティンがサンスクリットから借用したのでもない。それで、この契合
 わつまりこの用法のさわめて古代におけるものであることがあきらかで、アリヤ
 ン人種が歐亞の二部に分離せざる以前における習慣であつたことが、知れるので
 ある。格のすべての種類のものが、サンスクリット語に残存している。これらの
 ものの意義が多少變化したが、その形わたがいに混雜も惹き起すほどに、まだ變
 化していないので、使用上あきらかにその區別を存している。

この場所格と所與格とについて、發達したのは、所奪格(ablativ case)である。この格
 の原義が『より』から『すなわち、from a place』であつた。たろゝといふことわ、ほとん
 疑のない事實である。それで、英語にわさるるとき語詞があるが、これとあなじ
 職分も盡すものわ、サンスクリット語にも、ギリシア語にも、存在する。ラティン語
 にも、いって、caelitusのごとくtusといふ形式が、その職分も盡している。けれども、
 この格わ印歐語が分岐するよほど以前において、すでに成立していたとわ信じら
 れないので、もし成立していたとすれば、どの國語かの古い時代に存在している筈
 であるが、それが見えないのを見る、とこれまで述べた格ほど古いものでわあるま

いと思われる。けれども、この格の古いのわ、ツェンド語およびラティン語に全様
 の形において存在し、サンスクリット語およびギリシア語においても、全様の形
 形において存在しているから、あまり新しいものでわあるまい。かくのごとき一
 致わ、決して偶然に存在するものでわないのである。この格の原義わいま述べた
 と、一りの場所からあらゆる動作の發生すること、を示すものであるが、ある場合
 において、わ、人物、および事物が動作、を蒙る原因、またわ、事物の發生する原因、を示す
 ことがある。ラティン語でわ、それが、ある動作の仕遂げられる手段、またわ、それ
 仕遂げる器、具、を示すので、この場合にわ、この格わ動作の、エーゼント、を示すの
 である。つぎに、ある場合にわ、これが、ある動作の方法、を示すことがある。けれど
 も、この方法と手段との間にわ、随分區別を立てにくいことが、しばしばあるのであ
 る。つぎに、ある場合に、比較、を示すことがあるので、それわラティン語ギリシア語
 およびサンスクリット語などにも、よく存在している。

つぎに、印歐語に、および、臣、といふ接尾語を以て、ある一種の格を示すものがある
 して、これわ普通にインストルメンタルケース (instrumental case) と呼ばれている。

いま述べた所奪格は、このインストルメンタルの真髓であるが、しかしながら、インストルメンタルは、各言語にわあまり普通に存在しないものであり、かつ、その意義もやゝ不明なものである。それでサンスクリット語にわしはば使用されるものであるが、ラティン語にわわづかばかりしか存在しない。ギリシア語にわ叙事詩に存在するほかにわ存在しない。しかるにこの格がある場合において意味の分れることがあるので、たとえば、『ある人とともに』というように、『ともに』(with)の意味のことがあり、また、『あるものも以て』というように、『もつて』(with)の意味のことがある。その『とともに』の意味の場合にわ、この格は、ソシエチーフ(Sociative case)とも呼ぶことがあるが、その例は『わたくしわかの人と上野を行くところだ』に於ける『かの人と』であるし、その『もつて』の意味の場合にわ、その格は、インストルメンタル (instrumental case) として、その例は『わたくしわかれを切った』の『切て』である。英語でわ with という語が以上の兩種の場合に使用せられるのであるか、その中、『もつて』の意味の場合が純粹なインストルメンタルである。ラティン語にわこの格がすでに消滅したので、その職分は所奪格が盡している。

ロシア語もやはりそれと全様である。

これまで種々の格について、その發達を説明して來たが、しかしながら、これらのものわ、すべて單數の場合についてである。しかるに、この複雑になると、非常にまた複雑になつて、單數における場合のごとく、簡單に説明することが六かしい。それで、この複數の體形は、單數の語詞に、複數の意味を表彰するために、s を附け加えて、これがやがて變化したものだろ、と思われ、その歴史は、たしてこの通であるやら、はっきり分らない。ただし、二倍の意味を表彰する體形は、その通であるらしいのである。それから、複數の場合にわ、單數の場合のごとく、この體形が種々に分立しない。たとえば、所與格と所奪格とわ、その體形が全一であるし、倍數を示すインストルメンタルの體形は、以上二格の體形と全一である。倍數を示す領格と、ロカチーフとも、その體形が全一になっている。かくのごとく、複數における各種の格の體形が全一であるのわ、單數の場合におけるごとく、あきらかに、その區別を立てる必要が少いからである、と考へる。けれども、倍數を示す體形だけ、わ他のものに比較すると、別々に用いられているようにある。

以上格について説明し来た事実によって、ことに單數における場合によって格にわどれだけの種類のものが存在すべきものであるという一定の法則のないことが分る。言葉と換えていえば論理的思想を表彰するに足るだけの種類のものが存在しないということが知れるのである。今日においても、ギリシヤ語またワラティン語のごとき規則正しい國語を學んだ人々、この格たるや單にある思想を表彰するに必要な數だけ存在しているもので、その以外において、なんらのものも存在しないことと理解するだると思はう。それで、ギリシヤ語などにおける格の數、格においてわ一の標準たるべきもので、これに所奪格などお加えたのわローマ人種の失策であるかも知れないのである。それで、これらの体形は、はじめから熟慮を重ねて作成したものでなくして、ある思想を表彰する必要上から、段々に發生したものであると思われ。それであるから、全一の事物を表彰するのに、二種も三種もその方法お具えて置くというよりなことが、大抵わないものである。

以上叙述して来たところ、屈折語すなわちそれに屬する印歐語についてである。

それで、屈折語において各語詞の成立する状態、わ、ほ、右の通であるが、しかしながら、これを形態を異にする加添語すなわち、それに屬する日本語などにおいて、また、た、く、その状態を異にしている。その一例をいえば、日本語にわ、印歐語に存在するよりな格接尾語が存在していない。印歐語において、格接尾語は、語基に附屬して、種々の意義もしく、文法の關係を表彰するのであるが、日本語において、格接尾語の盡す職分も、手爾遠波が盡している。すなわち、主格わがは、領格わが、目的格わを、所與格わに、場所格わよりからへ、所奪格わよりから、インストルメントルわにてなど、いう手爾遠波によって、盡しているのである。日本語の法則を説くのに、はじめて格というものを設けたのは、鶴峯戊申で、かれが天保年中にあらわした有名な「語學新書」の中に、つぎのごとき九格を立てた。

- 一、能主格 (係辭と結辭)
- 二、所生格 (轉言と轉言との間にあるのが)
- 三、所與格 (に、と、へ)
- 四、所役格 (を)

- 五、 所奪格 (よりからゆゑ)
- 六、 呼召格 (よ、や、やよいて)
- 七、 現在格 (めりらんべき)
- 八、 過去格 (てけりつし)
- 九、 未來格 (ずてじぬんなん)

これが蘭文典の法式から脱化したものであるから、日本語の性質と合わないところがあるのわ、いうまでもないので、ことに格中に現在過去未來お入れてあるのわ、他の蘭學者もあえてしないところである。その後、日本語の文典に格お立てた學者わないが、今日てわ歐洲の文典に倣って、まゝ格お立てゝいるものもあるよゝてある。けれども、これわ印歐語のごとき屈折語におけるものと、全一視することが出来ないのて、つまり印歐語において格であらわしている思想わ、日本語においてもやはり存在してゐるが、その格接尾語に相當するものわ、手爾遠波であるといふに過ぎないのである。

また動詞の法(mood)口氣(voice)といふものも印歐語におけるものと日本語におけ

るものゝとわ、全然一致することわないのである。これで、法わ動詞ノ變化ニヨリテ生ズル語氣ノ態度ナリ」といふもので、ラティン語にわすてに述べたと、一り直説法、可能法、接續法、命令法、不定法、名詞法、分詞法等が備つてゐるが、しかしながら、これらのものわ、いづれも接尾語によりて、おのゝ表彰されてゐる。けれども、日本語における直説法、接續法、命令法、名詞法、分詞法等わ、接尾語が特に附き添つてゐることわなく、ただ語尾がそれらの諸法において異つてゐるといふに過ぎない。ことに可能法や不定法わ存在しない。もっとも可能法における思想わ「讀まる」「起さるる」のごとく、らるといふ助動詞を附け加えて、表彰されることがある。しかしながら、ラティン語におけるがごとく、屈折に原づくことわとにかかないのである。また、英語などの可能法わ、can, mayといふ助動詞を加えては、じめて表彰されるのて、この點わ日本語のに似寄つてゐる。それで、思想がおなじく存在してゐても、それを表彰する語形が、おのゝ異つてゐるところが、各國語の分立するに至つた所以である。

つぎに、口氣わ動詞ノ一種ノ變態ニシテ、以テ文主ト動詞ノ動作トノ關係ヲ指別セ

シムル別体ナリ』というもので、これに能相 (active) と所相 (passive) との二種ある。それで、日本語におけるこの二種の語形は、ラティン語におけるものと違って所相に引らるという助動詞を附け加えて表彰する。また、他人を使役する意義を表彰する語形も、一箇獨立のものでなくして、すさすしむ という助動詞を附け加えたものである。それから、現在、過去、未來の時を表彰するにも、疊語を用いるとか、母音を變化するとか、また、わ、ある、接尾語を附け加えるとか、いう、こと、わ、なく、して、やはり、それ、ぞ、れ、助動詞を附け加えるのである。その他、日本語にわ (gender) すなわち、男性、女性、中性等の區別がないこと、單複の數、一個獨立の語形で表彰することがないことなど、わ、日本語の、印歐語から異なる點である。それで、複數を示すのに、日本語でわ疊語を用いることがある。『ひととびと』くにぐに『やまとく』など、その一例である。この疊語は、單にこの複數を示すばかりでなく、分量や程度の優っていることと表彰するに用いられる。『いとく』とほどほしき』『みづみづしき』など、わ、その一例である。われが自分の表彰する思想を強めたり、勵ましたり、またわ、ある、特殊の思想を表わしたりするのに、この疊語法を用いることわ、さ、わめて自然なことで、

したがって太古もしくはわ野蠻社會において、いとく用いられたこともあきらかである。現今でわかのマレー語族に屬する言語中に、この疊語がもっとも豊富に存在している。この語族でわ意義の種々の變化、またわ、複數のごとき文法上の職分をはじめ、形容詞の比較法において、この最等を表彰し、動詞における使役の意義を表彰し、ある、い、わ、その他種々の場合に、これを應用しているのである。けれども、この疊語法は、單に太古時代もしくはわ野蠻社會においてのみ用いられるということわない。ただこれらの場合において、その言葉の發生する機會が多いというだけである。ラティン語にも、ゴシック語にも、上世の英語にも、中世の英語にも、それぞれ存在している。印歐語を組成している語詞の成立する状態は、これまで段々述べて来たが、これらの状態は、日本語におけるものとわ、よほど異っているのわ右の通である。印歐語でわ文法上における種々の關係が、おもに接尾語によって盡されるのであるが、これに反して、日本語でわ、それ、わ、おもに手爾遠波とか助動詞とか、いう、よいなる職分を盡しているが、日本語にはそ、いうことわない。もっとも

數にあつて *hitotsu, futatsu, misu, yatsu, yatsu* のこととあるものがあり *sonu, simu* (染) *maganu, mageru* のごとく自動他動の區別のあらわれるものもあるがけれども、これわ印歐語にちけるものとわよほど違つたものである。それで形態上カタチからいへば、印歐語わ屈折語に屬し、日本語わ加添語に屬するといふこととわあきらかな事實である。

第六章 品詞の發達とその分類

前章において動詞わいかにして人稱を指示し、時を指示し、名詞わいかにして格を指示するか、という問題について、ほぼ述べ盡したのである。それで動詞と名詞との發達についてわまづ一と一り述べ盡したのであるが、しかしながら、文典の大部分わこの動詞と名詞との叙述によつて、盡されているものとわいえない。勿論、品詞 (*Parts of speech*) 中において、動詞と名詞とわ、その主要なる位置を占めているのであるが、その以外にも、重要な職分を盡すものがないでもないのである。一個の動詞と、主格および目的を表彰する名詞とが、ありさえすれば、とにかく主語の目的語および、説語の區別が出来るから、一の思想を完全に表彰することが出来るわけである。かくのごとくにして表彰する思想も、とより單純なるものであるから、も一層複雑なるものになると、種々の形式を要するのである。たとへば、動作のある方法を示す方法なども必要で、いかなる時において、いかなる所において、いかなる手段によつて、その動作が仕遂げられたか、というその方法を示す形式も必要である。

それで、かくのごとき動作の原因目的および結果を前章に述べた通り、種々の格によって表彰されるのである。この思想を単純なものから複雑なものに至るまで、段々表彰するについて、その目的に應ずるがため、種々の格が発達したことを、言語史のあきらかに示すところである。これらのことと、すでに前章にくわしく述べたから、こゝに、繰返さないが、とにかく、単純なる思想から、漸次複雑なる思想を表彰するについて、その目的に應ずるがため、言語がいかに発達するものであるか、ということだけ、考に入れて置かなければならぬ。

それで、単純なる思想を、動詞と名詞とで、十分に表彰することが出来るが、複雑なるものになると、その他の形式がそれぞれ必要を感じて来るのである。それゆえ、現在のごとく、種々の品詞が発達したのであるから、つぎにその發達の概略を叙述しよう。その手始めとして、副詞(adv.)と、いかなるものか、これはいかにして發達したものであるか、ということも述べよう。一、このadv.という名稱を、動詞と離るべからざる特殊の關係が、存在していることを表示するもののよゝであるが、かしながら、かならず、そゝであると、わ定まらぬ。この點から見れば、ギリシア語

の Epithema という名稱を、joined to the predicate という意義を有しているから、このものの性質を、adverb という語より、精密に表彰しているのである。それで、この副詞を、どーして起って来たか、というと、これわ印歐語において、元來一の格を彰示していたものである。たとへば、ギリシア語に於いて、dikaíos, sôdhrônios というよゝに、とという語尾を有する副詞を、元來いづれも、奪格であつたのである。その他のものも、ちゝくわロカチーサが、インスタルメンタルであつたのである。しかるに、これらのもの、段々格の性質を失ひ、名詞に附屬しなくなつて、一個獨立の品詞となつて、副詞という名稱を帯びるよゝになつたのである。これわギリシア語ばかりでなく、イギリス語においても、同様であるので、たとへば、once, twice など、もとも one, two の領格である。また、while, seldom なども、格を示すことがあるものである。この副詞にも altogether, nevertheless, now-a-days, whereupon のごとく、種々の語詞から成立しているものがあるが、その中で、now-a-days の如く、領格 whenupon のごとく、場所格を表示するものがある。中に up, on, off の如く、元來格を表示する語であつたかどゝ、容易に證明の出来ないものもあるが、しかしながら、これとても

他の例から類推して、元來格を表示したものであることと知るに難くないのである。それゆゑ、印歐語の副詞は、現今で一個獨立の品詞として取扱つても差支ないが、歴史的に格から段々脱化したものであることと、明な事實である。これにヘール一人の管見でわないので、バウルなどもかれの「言語史の原理」(Principien der Sprachgeschichte)の中において、副詞、名詞の格から脱化したもので、しかも屈折の發達しない以前においてすでに成立したものである。その成立した當時は、その語幹の形式で副詞として使用されたのである。そして、*to speak true, to entreat evil*のごとき形式で副詞としても、とも古代のものである、と考へるといふてゐるし、ヘンリースウィートも、かれの「歴史的英語文典初歩」(A Primer of Historical English Grammar)において、古代のイギリス語における副詞、形容詞と名詞とから發達したものである、といふことと説いてゐる。それで、これらの人々の學說から見れば、副詞は元來名詞の格を表示していたものといふことが明である、と信ずる。副詞は十分明瞭に動作の方法を表示するもので、この點において、名詞の格とはぼ一致する。印歐語の副詞はまづ大體右のとおりであるが、わが國語におけるも

のわどいかといふに、印歐語におけるものよりに判然とその起源を説明することが出来ない。それで、現今副詞と認められてゐるものに、種々あるが、その中も「とも副詞らしいもの、あきらかに」ほがらかに「のどかに」すみやかに「きよらかに」やすらかに「すこやかに」などのごとく、語尾に「ち」帯びてゐるものである。この「ち」は副詞的性質をもつとも明瞭に表彰するもので、これに附け加へると、多くの語詞は副詞の職分を盡すよになるものである。以上の「あきらかに」「のどかに」「すこやかに」など、その語尾の「ち」を除けば、まづ一個獨立の語詞として存在することが出来なくなるものである。しかるに、この語尾に「ち」は名詞に附屬して、時を示し、所を示す、互爾遠波に、よほどよく似寄つてゐるものである。印歐語におけるものよりに、副詞は名詞の格から脱化したものといふよりに、さわかきに説明すること、わかかき、副詞の語尾に「ち」名詞につく、互爾遠波の「ち」と、古代においてなにかの關係があつたもので、わあるまいか、といふこと、わある程度まで疑われるので、その想像を決して空想として、一概に排斥すべきものでもなからう、とちも。

つぎに前置詞 preposition の起源は、*わ*、*か*、*と*、*う*、*に*、*これ*、*わ*、*元來*、*副詞*、*であつた*、*こと*、*も*、*一歩*、*進んで*、*い*、*え*、*ば*、*名詞*、*の*、*格*、*であつた*、*こと*、*わ*、*ほとん*、*ど*、*疑*、*の*、*な*、*い*、*こ*、*と*、*で*、*あ*、*る*、*。*、*イ*、*ギリ*、*ス*、*語*、*に*、*お*、*い*、*て*、*I ran him through.*、*また*、*わ*、*I ran him through the body.*、*と*、*う*、*文*、*の*、*through*、*わ*、*元來*、*副詞*、*であつた*、*のが*、*段々*、*變化*、*して*、*前置詞*、*になつた*、*ので*、*あ*、*る*、*け*、*れ*、*ど*、*も*、*ゴ*、*ン*、*ク*、*語*、*の*、*時*、*代*、*に*、*お*、*い*、*て*、*わ*、*た*、*し*、*か*、*に*、*名詞*、*で*、*あつた*、*よ*、*う*、*に*、*考*、*え*、*ら*、*れ*、*る*、*。*、*ラ*、*テ*、*ン*、*語*、*の*、*Coram*、*な*、*ど*、*も*、*元來*、*わ*、*副詞*、*で*、*あ*、*る*、*が*、*こ*、*れ*、*も*、*ず*、*と*、*以*、*前*、*に*、*わ*、*名詞*、*の*、*一*、*格*、*を*、*表*、*示*、*し*、*て*、*いた*、*ので*、*あ*、*る*、*。*、*そ*、*れ*、*で*、*副詞*、*の*、*起*、*源*、*に*、*お*、*け*、*る*、*が*、*ご*、*と*、*く*、*正*、*確*、*に*、*斷*、*定*、*す*、*こ*、*と*、*わ*、*す*、*こ*、*し*、*く*、*困*、*難*、*で*、*あ*、*る*、*が*、*こ*、*の*、*前*、*置*、*詞*、*も*、*も*、*と*、*わ*、*名詞*、*の*、*格*、*で*、*そ*、*の*、*意*、*義*、*を*、*明*、*瞭*、*に*、*限*、*定*、*す*、*る*、*職*、*分*、*を*、*取*、*つ*、*て*、*いた*、*た*、*もの*、*で*、*あ*、*る*、*。*、*と*、*も*、*お*、*も*、*わ*、*れ*、*る*、*。*、*そ*、*れ*、*で*、*バ*、*ウ*、*ル*、*も*、*こ*、*の*、*前*、*置*、*詞*、*の*、*起*、*源*、*を*、*論*、*じ*、*て*、*い*、*う*、*の*、*に*、*前*、*置*、*詞*、*わ*、*元來*、*一*、*個*、*獨*、*立*、*の*、*語*、*詞*、*で*、*あ*、*つ*、*た*、*の*、*で*、*あ*、*る*、*時*、*代*、*に*、*お*、*い*、*て*、*わ*、*副*、*詞*、*で*、*あ*、*つ*、*て*、*動*、*詞*、*の*、*表*、*彰*、*す*、*る*、*動*、*作*、*の*、*方*、*向*、*を*、*表*、*示*、*し*、*て*、*いた*、*た*、*もの*、*で*、*あ*、*る*、*。*、*し*、*か*、*る*、*に*、*自*、*然*、*の*、*發*、*達*、*が*、*そ*、*れ*、*を*、*し*、*て*、*動*、*詞*、*か*、*ら*、*分*、*離*、*し*、*て*、*名*、*詞*、*に*、*附*、*屬*、*せ*、*し*、*め*、*る*、*よ*、*う*、*に*、*な*、*り*、*名*、*詞*、*の*、*格*、*接*、*尾*、*語*、*も*、*消*、*滅*、*せ*、*し*、*め*、*し*、*か*、*し*、*て*、*格*、*接*、*尾*、*語*、*が*、*從*、*來*、*盡*、*し*、*て*、*いた*、*た*、*職*、*分*、*を*、*こ*、*の*、*前*、*置*、*詞*、*を*、*し*、*て*、*盡*、*さ*、*し*、*め*、*る*、*よ*、*う*、*に*、*な*、*つ*、*た*、*の*、*で*、*あ*、*る*、*と*、*説*、*い*、*て*、*い*、*る*、*。*

111B

かくのごとく、どの前置詞ももと一個獨立の意義を表彰していたものであるが、言語自然の發達に伴つて、ついにその獨立の意義を失うよゝになつたのである。それわひとり印歐語においてばかり存在する現象でわないので、支那語においてこの前置詞の職分を盡すものわ、一般に動詞である。たとえは、インストルメンタルの *with*、*を*、*以*、*と*、*いう*、*語*、*で*、*表*、*わ*、*さ*、*れ*、*て*、*い*、*る*、*。*、*また*、*アラ*、*ビ*、*ア*、*語*、*の*、*前*、*置*、*詞*、*わ*、*元來*、*わ*、*名*、*詞*、*で*、*よ*、*ほ*、*ど*、*古*、*い*、*時*、*代*、*に*、*お*、*い*、*て*、*名*、*詞*、*か*、*ら*、*分*、*岐*、*し*、*た*、*もの*、*で*、*あ*、*る*、*。*、*そ*、*れ*、*で*、*古*、*代*、*に*、*お*、*い*、*て*、*わ*、*こ*、*の*、*語*、*詞*、*も*、*今*、*日*、*の*、*屈*、*折*、*語*、*に*、*お*、*け*、*る*、*が*、*ご*、*と*、*く*、*整*、*然*、*た*、*る*、*一*、*定*、*の*、*法*、*則*、*の*、*下*、*に*、*存*、*在*、*し*、*て*、*いた*、*た*、*ので*、*な*、*く*、*そ*、*の*、*使*、*用*、*の*、*方*、*法*、*も*、*よ*、*ほ*、*ど*、*自*、*由*、*で*、*あ*、*つ*、*た*、*し*、*そ*、*の*、*職*、*分*、*も*、*よ*、*ほ*、*ど*、*茫*、*漠*、*と*、*し*、*た*、*もの*、*で*、*あ*、*つ*、*た*、*。*、*ラ*、*テ*、*ン*、*語*、*や*、*ド*、*イ*、*ッ*、*語*、*な*、*ど*、*に*、*お*、*い*、*て*、*す*、*ら*、*こ*、*の*、*前*、*置*、*詞*、*わ*、*しばしば*、*名*、*詞*、*の*、*後*、*に*、*來*、*て*、*あ*、*た*、*か*、*も*、*後*、*置*、*詞*、*(post-position)*、*の*、*ご*、*と*、*く*、*見*、*え*、*る*、*もの*、*が*、*あ*、*る*、*。*、*ス*、*メ*、*リ*、*ア*、*語*、*な*、*ど*、*の*、*古*、*代*、*に*、*お*、*い*、*て*、*わ*、*こ*、*の*、*後*、*置*、*詞*、*と*、*稱*、*す*、*べ*、*き*、*種*、*類*、*の*、*もの*、*が*、*あ*、*ら*、*か*、*に*、*存*、*在*、*し*、*て*、*いた*、*た*、*ので*、*あ*、*る*、*。*

印歐語における前置詞の發達を以上に述べたと一りであるが、さてわが國語においてわ、ど、か、と、い、う、に、わ、が、國、語、に、お、い、て、わ、こ、の、前、置、詞、と、い、う、もの、が、ま、つ、た、く、存

在しなす。しかしながら、これと同一の職分を盡すものがあるのを、それはいうまでもなく、豆爾遠波である。この豆爾遠波は印歐語における前置詞と違つて、名詞代名詞などの後に來るので、まづ、たゞ後置詞である。すでにチャムバレーンの日本文典などに、これと豆爾遠波といわないうて、後置詞といつてゐる。『より』から「まて」「へ」「に」「の」等々、みな名詞代名詞の後に來るものである。これで、これらの語詞の起源、わど、かといふと、今日わが邦において成立つてゐる言語學の發達程度で、わななく、容易に解釋することが出來ない。これ、印歐語におけるものごとく、副詞から發達したもので、なほ一歩遡つて見れば、名詞の格であるといふより、に、か、や、かに判定することが出來ない。なぜかといふと、今日われわれの手に許に存在してゐる言語の材料は、大和民族の發達から見れば、比較的、新しいものばかりである。それらの材料は、たとえば、紀伊万葉や風土記などにおいて、現今の豆爾遠波が一個獨立の語詞だと、たとえば、副詞などとして使用されてゐるものがなく、すでに豆爾遠波となつてゐて、その前身を見えないのである。それゆゑ、われわれの所有する材料で、今日の豆爾遠波の前身を知ることが出來ないので、名詞から發

達して來たのか、副詞から發達して來たのか、不明である。しかるに、今日現に存在してゐる、ある地方の方言に、「ここ」行くか、「上野」行く」といふより、な形式が存在してゐる。この「さ」は、わ方向を示すもので、「と」は「かう」の「さ」の轉訛したものである。この「さ」は、わ方向を示すもので、「と」は「かう」の「さ」の轉訛したものである。それゆゑ、現今の豆爾遠波も、今日存在するものより、一層古代の材料を得ることが出來たら、いかなるものから脱化したか、とにかく、いくらか説明が出來ようといふ。今日でも、豆爾遠波は、もとよりの虚語(form-word)でなく、ある時代において、わ、かな、ならず、實語(full-word)であつたといふことだけ、たしか、い、え、ると、ち、もう。

つぎに、接続詞(conjunction)と、わ、い、かな、る、もの、か、とい、う、こと、が、これ、から、解、釋、し、な、け、れ、ば、な、ら、ん、問、題、で、あ、る。名詞の格、獨立の格でも、すでに副詞や前置詞に脱化したものでも、すべてある動作の方法を表示するものである。一の動作の外に、また他の動作が考に加わらない以上、わ、と、に、か、く、そ、の、動、作、の、方、法、を、表、示、す、る、も、の、で、あ、る。けれども、一の動作の以外に、他の動作の加つて來たとき、たとえば、一の動作が

他の動作の条件になるか、または結果になるよゝな場合にわ、これあきらかに表示するためになにかある方法がなければならぬ。その方法のもゝとも古くもゝとも簡単なもの、その二個の動作も並列せしめるので、すなわち、*co-ordinate clauses* を作るのである。ハイプルの中に

Thou takest away their breath, they die.

という文があるが、これわ文法上 *co-ordinate clauses* である。かくのごとき文の單純なもの、ヴェーダに澤山存在している。しかるに、かくのごとき二個の文も並列したのみでなく、これもある語詞によって連結したものがあつた。たとへば

Thou takest darkness, and it is night.

というの、以上のものと違つて、『夜』という文、わ「神が暗黒にした」という文の結果になるのである。けれども、これもやはりコーディネートであつて、主文と補足文と、二つに分れるものでないものである。これと同じよゝな文、ホーマーなどの作にもゝく存在している。つまり文の形式がまだ十分發達しない時代にあつて、二個の語句も連結するにわ、以上のごとき方法も取つていたのである。

しかるに、思想が發達するにしたがつて、その表彰の形式も發達して來るので、ついに論理的立脚點から、二個の語句も區別するために、ある特殊の語詞を用いるよゝになつて來た。これは

When thou takest away their breath, they die.

Thou takest darkness that it may be night.

のごとき文にあつて使用されている *when, that* である。この種類の語詞にもよゝ三種ばかりあつて、その一 *and, also* などのごとく、二個の語句も連結するために使用されるもの、この二 *but, however* などのごとく、二個の文を連結するために使用されるもの、その三 *when, if, so that, lest* などのごとく、補足文も主文に連結するために使用されるものと、この三種あるが、これはいづれもみな接續詞と稱せられるものである。さてこれらの語詞、わいかにして發達して來たかが、つぎに起るべき問題である。

す。で。に。述。べ。た。と。り。前。置。詞。と。副。詞。と。わ。名。詞。の。格。か。ら。發。達。し。て。來。た。も。の。で。あ。る。が、この接續詞もやはりこれとあなじく、あきらかに格から發達して來たものである。

ただし接續詞わちく代名詞の格から發達して來たものである。Aletwa vhaの男性を示す目的格であるし、Bw同じ語基から轉訛するとも出来るが、しかしながら、氷島語のBという場所格と同じものであつたろゝということである。またラティン語でwemというのが、やはり關係代名詞の目的格であり、Bw指示代名詞の場所格であつた。ギリシア語でw、Bw關係代名詞の場所格、Ioswやはりその奪格である。それでラティン語などでw、接續詞の中でも、とも簡単なBemという語は、關係代名詞の形を具えてゐるし、ギリシア語などにもそれとよなじよ一な語詞がある。

以上述べた通り副詞も前置詞も接續詞もその語源に遡つて見れば、もどく同一のもので、二三の例外もあるけれども、名詞の格であつたのである。それゆゑこの三種のものわ、たがいに流用することが出来るので、副詞も前置詞にも用ゐることが出来る場合がある。たとえばラティン語のomw前置詞でもあり、接續詞でもあるものであるし、ギリシア語のIosw同時に前置詞でも、接續詞でも、副詞でもあるものである。もとより文章上の關係から見れば、それが前置詞であるか副詞

であるか、またわ接續詞であるかわ、明瞭に分るので、別に混雜を招ぐよゝなことがないが、しかしながら、この根本的に存在する區別がないので、つまり全一の語詞から發達したものである。日本語でも「はたまた」「かつ」「また」のごとく、副詞にも接續詞にも用ゐられてゐるものがあるが、これらのものわ、いづれも全一の語詞たることわ、いまさらいうまでもないことである。

ちわりにも、一つ品詞として、その起源を論ずべきものわ、感動詞(interjection)である。しかしながら、これわ元來品詞として、名詞や動詞などと、同列に並ぶべきものでない。なので、一個獨立の文である語句である。もとより、主語と説語とを具えた完全な語句で、わないが、とにかく、一個獨立のもので、これのみで、一の思想を表彰するものといつて、よろしいものである。從來文法學者わ大抵これ品詞の中に列してゐるが、しかしながら、これわ誤で、決して名詞や動詞と同一に取扱うべきものでないものである。それゆゑ、この語詞の起源および、この發達に關することわ、こゝで述べるもので、わないので、別に獨立に説くべきものと考え、こゝでわ省いて置く。

以上綴々述べて来たところによつて見れば、品詞、名詞と動詞との二つから分生したものと、いうことが明である。この品詞の分生について、富士谷成章「脚結抄」に、その意見も述べてゆゝのに、

あめつちの言靈は、理をもちて、しづかに立てり。そのはじめは名にもあらず、挿頭装にもあらず。たとへば、水といふ神のいまそかるは、雨雪などいふべくもあらず、海川などいふべくもあらず、まして、酢酒など名づくべくもあらず、ぬがごとし。と説きつぎに、鈴木明わかれの『言語四種論』において、やはりその起源について論じて、いふのに、人心活動の状態の、音聲にあらわれたのが、すなわち、豆爾遠波の始である。それゆゑ、豆爾遠波、言葉の骨髓精神である。つぎに、音聲ももつて、万物に名稱もつけて、これを區別するの、わ、舛の詞である。舛の詞も、豆爾遠波ももつて、繁ぎ、これを活し用いるときに、豆爾遠波と舛と合して、二種の言葉となるのが、すなわち、形状の詞と作用の詞とである。これを要するに、四種の言葉、わ、豆爾遠波の聲と、万物の名目の聲との、二つに過ぎないと論じている。わが邦の學者、わ、かくのごとく、大體のことについて、その起源も論じているのみで、又品詞、わ、いかにして成立し

たかわ、まだ解決せずにあるのである。

品詞の起源問題、わ、しばらく措いて、名詞、形容詞、代名詞、動詞、副詞、前置詞、接續詞、および感動詞というより、な區別、わ、文典において、もつとも必要なことであるけれども、これらの品詞、わ、ことごとくその成立も必要とすること、わ、ないのである。國語にわ、それがことごとく存在していない。つまり、印歐語の全體について見れば、以上のごとく存在しているというのである。今日でわ、すべての文法學者が、これ承認しているけれども、古代において、わ、かくのごとく、わ、しく分類されていなかた。古代の文法學者、わ、自分の感知した品詞だけ、成立しめていたので、その他のもの、わ、これよりの、ち、に、だ、だ、だ、追加されたものである。アリストートル、わ、名詞と動詞との存在も認め、た、し、副詞ともなり、前置詞ともなり、また、接續詞ともなる。一品詞の存在も認め、た。また、名詞と代名詞とも連結する、一種の品詞の存在も認め、た。けれども、わ、これらのも、ち、すべて必要にして、缺くべからざるものと、わ、認めなかつた。つぎに、一の注意すべきこと、わ、アリストートルが、時の表彰も、以て、動詞の職分の一部と認め、た、ことであるが、これは、ギリシア語に、わ、時、も、表彰する形式が、

非常に夥多に存在しているから、それてかくのごとき見解を抱くに至ったのである。しかしながら、この時の表彰、偶然にも動詞の職分の一になったので、セミチック語におけるがごとく、この職分を盡さないからといって、動詞も依然として動詞である。すこしもその成立を妨げない。ドイツ語で動詞のこと *Zeitwort* すなわち時の詞といっているが、これもアリストートルと同じ見解から来たものである。しかしながら、これら動詞に缺くべからざる必然的の條件でわないのである。

つぎに、ストイック派の哲學者、アリストートルより、一層詳細に分類している。かれらら名詞を普通名詞と固有名詞とに分類し、普通名詞に *prosegoria* 固有名詞に *onoma* という名稱を附し、つぎに、副詞に *pandektes* という名稱、代名詞に *arthra* という名稱を附し、この代名詞を定代名詞(これわ人代)と不定代名詞(これわ人代名)とに分類している。

つぎに、文法研究のもっとも隆盛であったアレキザンドリア時代において、わどかかというに、ゼノドタスわ代名詞に *antonomasia* という名稱を附し、代名詞とわまうた

く独立すべきものとして、冠詞に *arthron* という名稱を附した。しかるに、この代名詞というものの、いかに事物を表明するかが、實に曖昧なもので、*I told John that he was wrong* という文において、*he* の代名詞 *John* という詞の代表者である事、明であるが、*he who does wrong is unhappy* という文において、*he* の代名詞 *he* かなる名詞の代表者であるか分らない。けれども、代名詞 *he* 名詞の一種で、名詞と同じく語基も格も所有しているから、歴史的にいえば、名詞たることわ明である。論理的にわ一個独立の品詞として、成立し得るものであるが、その發達からいえば、名詞と異なることがないものである。つぎに、この時代において、アリストターチヤス副詞、前置詞 *syn*、接續詞 *et*、包含した *undesinoi* というものから、一個独立のものとして、前置詞を分離させた。また、パーチシブルも獨立させた。このパーチシブルすなわち分詞 *he*、名詞の性質も、動詞の性質も、分有するものとして、*metache* という名稱を與え、一個獨立の品詞に立てたのである。

ギリシア時代において、*he*、品詞の分類も、かくのごとき程度まで發達したが、この文法上の考が、ローマに輸入されたのである。その輸入された *he*、名詞 (*onomata*)、分詞

(rhema) 分詞 (metoche) 冠詞 (arthron) 代名詞 (anonymia) 前置詞 (prothesis) 副詞 (epithema)
 接續詞 (sundesmos) の八品詞であつたが、不思議にもこの八品詞という數は、その時代
 から今日に至るまで存在している。しかるに、その後この八品詞の數を減じよ
 とした文法學者があつて、やかましく論じた結果、metoche を動詞に附屬せしめ、arth-
 ron をラチン語で必要なものとして、取除いた。これで、八品詞が六品詞にな
 ったので、事物を表彰するものとして物名詞 (substantive) 事物の性質を表彰するも
 のとして形容詞 (adjective) という二個の品詞を立てた。名詞を物名詞と形容詞と
 の二に分類すること、論理上必要なことであるが、この構造をまったく同一であ
 るから、ラチン語を學ぶものにも、必要のないことである。つぎに、ギリシアの哲學
 者、別に品詞として設けなかつたが、ローマ人の感動詞という一品詞を立てた。
 これゆゑ、さきに二個の品詞が删除されたが、その代りに、形容詞と感動詞と二品詞
 があらたに加わつたから、やはり八品詞の數は神秘的の數のよゝに残っているの
 である。

つぎに、この八品詞を accidentia というのになにゆゑであるか、これも一の問題であ

るが、アレキザンドリア時代において、ディオニシアスや、その先輩のある學者など
 わ、名詞にわ男女等の性、原始的またわ分出的というよゝな種類、單一語またわ結合
 語といふよゝな階級、單複の數、および格とこの五種のもの、が附纏っていること
 を認めていた。名詞に附屬したこの五種のもの、を、ローマでわ accidentia と呼んでい
 た。しかるに、この名稱が動詞にも應用されるよゝになつて、これからだんだん八
 品詞全体を accidentia と呼ぶよゝになつたのである。

以上述べたとゝり、品詞を八種ばかりに分かれてゐる。勿論、文法學者の意見によ
 り、またわ國語の性質によつて、その品詞の種類にも、數にも、多少の異同があるけ
 れども、普通以上の八種である。しかるに、この八種の分類を、論理上から見ても、文
 法上から見ても、はたして當を得たものであるか、どゝか、これが一の研究すべき問
 題である、と考へる。

一、品詞の分類、いかなる立脚點によつてなすべきものか、といふに、それに三點
 ある。第一、各語詞の意義の上より、第二、各語詞が文の上において、盡す職能よ
 り、第三、各語詞の形態、たとへば屈折の有する状態、および語詞構造の状態等の上

よ。り。と。の。三。點。か。ら。進。ん。で。品。詞。を。分。類。す。る。の。が。今。日。普。通。に。行。わ。れ。て。い。る。方。法。で。ある。そ。れ。で。第。一。の。立。脚。點。か。ら。見。れ。ば。物。名。詞。形。容。詞。を。よ。び。動。詞。と。い。う。こ。の。文。法。的。範。疇。(*grammatical categories*) を。事。物。性。質。を。よ。び。動。作。と。い。う。こ。の。論。理。的。範。疇。(*logical categories*) に。ま。ち。し。く。對。應。す。る。も。の。で。あ。る。そ。れ。ゆ。え。以。上。の。ご。と。き。文。法。的。範。疇。を。正。確。に。し。て。ず。こ。し。も。動。か。な。い。も。の。の。よ。り。で。あ。る。が。し。か。し。な。が。ら。よ。く。研。究。し。て。見。る。と。決。し。て。そ。う。で。な。い。た。と。え。ば。物。名。詞。わ。い。つ。て。も。事。物。を。表。彰。し。た。も。の。か。と。い。う。に。か。な。ら。ず。し。も。そ。う。で。な。い。な。か。に。は。性。質。を。表。彰。し。た。も。の。も。動。作。を。表。彰。し。た。も。の。も。あ。る。『樂。し。む』『白。む』『清。む』『嬉。し。む』と。か。brightness, whiteness と。か。い。う。よ。り。な。の。わ。事。物。そ。の。も。の。の。名。稱。で。わ。な。く。し。て。そ。の。性。質。を。表。彰。し。た。も。の。で。あ。る。ま。た。『さ。ふ。し』『朝。寝』『浮。き。沈。み』『降。参』な。ど。い。う。よ。り。な。も。の。も。や。は。り。事。物。そ。の。も。の。の。名。稱。で。わ。な。く。し。て。そ。の。動。作。を。表。彰。し。た。も。の。で。こ。の。種。の。名。詞。を。nomina actionis と。い。っ。て。い。る。の。で。あ。る。つ。ぎ。に。動。詞。わ。ど。い。か。これ。わ。い。つ。て。も。動。作。を。表。彰。す。る。も。の。で。あ。る。か。と。い。う。に。存。在。や。状。態。を。表。彰。し。あ。る。い。わ。性。質。を。表。彰。す。る。こ。と。が。あ。る。『remain』と。か。to be white と。か。い。う。の。わ。そ。の。好。例。で。あ。る。ま。た。代。名。詞。や。數。詞。な。ど。も。物。

名詞や形容詞に混同さすべきものでなく、まったく區別すべきものであるのみならず、物名詞的に用いられる場合と、形容詞的に用いられる場合とも、ちのくこれと區別すべきものである。six went and six stayed にちける six と six men にちける six とちのく區別すべきもので、混同してはならぬものである。これにて代名詞や數詞が名詞中における一種のもので、物名詞と混同すべきものでないとするれば、副詞に對してもそれと全じ關係にあるものと見なければならぬ。つぎに、接續詞わどいかというに、この規定を随分人爲的なもので、いかなるものが接續詞といつて、他の品詞とこれを區別すべき標準がない。たとえば、there という語詞など、接續詞らしいが、左のごとき文章においても、やはり副詞として取扱われているのである。

Where, in former times, the only remedy for misgovernment real or supposed
was a change of dynasty, the evil is now corrected at not greater cost than a
ministerial crisis.

單文において、前置詞と接續詞とを區別すべき、唯一の標準を、格を有することと否

とにあるもので、before, since after のごとき語詞を單文における場合にわ前置詞と呼び、二文を結合する場合にわ接續詞と呼ぶのわ不合理である。

以上わ語詞の意義より品詞を分類したときに起る不都合であるが、つぎに文の上における職能の側から語詞を分類すれば、ど一かどゆ一に、この場合わ語詞を三種に分類することが出来る。第一わ單獨に、一の文を組成し得る語詞、第二わ文を組成する一員として成立つ語詞、第三わ文を組成する各語詞を連結するだけの目的に使用される語詞と、この三種に分類する事が出来るのである。かくの如くまづ分類して見ると、第一類に属する者わ感動詞である。この感動詞わ普通にわ一語であるが、ある場合にわ、つぎの如く、前置詞をその一員として所有する事もある。

Woe to the land! Out on thee!

第二類にわ、完全なる文を組成するに必要なもので、その中にわ名詞や動詞が含まれるのである。第三類にわ前置詞や接續詞のごとき語詞と語詞とを結合する職能を取るものが属するのである。それで、かくのごときとく三種に分類しても、それぞれ困難があるが、よしこれが、故障なくいくとしても、他の方面にこの分類の立脚

點を危からしめることがある。それわなにかというに、名詞わ文の主語となり、目的語となり、動詞や形容詞わ説語となる、ということわ、名詞、形容詞、および動詞が、文の上において盡す主なる職能である。しかるに、名詞も形容詞ともなじく、限定語にもなり得るもので、つぎのごときものわその一例である。

We are man We are manly

これに反して、名詞にあらずして、主語となるものがある。

Well begun is half ended

また形容詞で目的語となるものもある。

Slow and steady wins the race

He takes good for bad

Write it down, black on white

し。か。ら。は。文。に。お。い。て。各。語。の。盡。す。職。能。の。上。か。ら。分。類。す。る。こ。と。も。な。か。く。容。易。な。こ。と。で。わ。な。い。の。で。一。定。の。主。義。を。一。貫。さ。す。こ。と。の。出。來。な。い。事。情。が。い。く。ら。も。あ。る。の。で。あ。る。こ。れ。わ。わ。が。邦。の。言。語。に。取。っ。て。見。て。も。や。は。り。そ。う。で。單。に。そ。の。職。分。の。上。か。

ら見れば、『降れる雨』の『降れる』も、『白き雪』の『白き』も限定語として同じ取扱
 ち受くべきものである。『なし』も『あり』も説語として、これも同じ取扱を受く
 べきものである。然しながら、それと意義や体形の上から見れば、よほど大きな
 差異のあるものであるから、どこまでも區別するのが適當かも知れないのである。
 第三に語詞の体形から分類することすなわち屈折の有するものと有せざるもの
 とに分けるか、その屈折の状態によって分けるか、その一の方法である。かく
 のごとく、体形上から分類するとき、名詞、動詞、および屈折の有せざる語と、この三
 種に分けるのが印歐語において自然のことである。しかしながら、かくのごと
 く分類したにしても、やはり困難わなくならないので、たとえは名詞に屈折のない
 ものもあれば、代名詞の屈折の名詞のとわち、いかに違ふ、ということもある。それ
 て、國語によって、名詞の屈折の状態など、それぞれ異なるものである。イギリス
 語やドイツ語などにおける形容詞、比較級を作るものが出来るので、それが形容
 詞として著明な特徴であるが、しかしながら、サンスクリット語などで、名詞も動
 詞の人称もともに比較を有しているし、ラテン語でも、やはりある名詞、比較級

有している。これに反して、形容詞でもことごとく比較級を有すると、限らない
 ので、あるものに、これが存在し得ないといふことがある。わが邦の國語でも、こ
 の分類、わちよつと便利のよゝで、すでに東條義門など、これを実行しているが、し
 かしながら、仔細に吟味して見ると、やはり六かしい。たとえは、活く詞と活かない
 詞と、二に分けるとしても、活く詞の動詞や形容詞でも、名詞に轉成すると、それが活
 かないものになる。形容詞から轉成した副詞も、それと同じである。
 かくのごとく、今日普通に行われている品詞の分類、わいづれも、一定の原則から、一
 貫して割出されたものでなく、して以上述べた三種の立脚点から都合よく取纏
 めたもので、はなはだ不合理なタロス、ヂウ、ジ、ンである。一、体品詞も一定の原
 則により、一貫して八種か九種に分けるといふのは、實際不可能のことである。な
 ぜかというに、言語上において、種々の變轉が行われるもので、意義の上から、ある
 いわ、類推作用の上から、名詞が形容詞に轉ずることもあり、動詞、名詞に轉ずるこ
 ともある。また、名詞や動詞から、他の品詞がそれぞれ分生したものであるから、そ
 の中間に存在するものが、よくあるので、それらのもの、わどの品詞に組み入れて

よろしいか、ちよつと迷うことがある。たとえば名詞と形容詞との區別について見たらど一かというに、印歐語でわ形容詞は比較級を有すること、性の屈折を有すること、この二個の特質が、その体形上における區別點と認められている。勿論その一の國語について見たらそれより以外になら種々のものがあるだろうが、まづ著しいのは右の二である。しかるに形容詞にも用い方によって名詞のよ一になるものがあるし、また實際他の品詞に轉移してその實を失つたものもある。これに反して、名詞が形容詞として用いられることもあるので、この場合にわ、名詞が代表している事物そのものの全体を考へに入れることわなく、ただ事物の性質のみを表彰するのである。「かれは狐のごとく」といっても、その体格から面貌までが、ことごとく狐のと一りというのでなくして、その性質が狐に似寄っているといふことである。それで、*a virgin fortress, a maiden over, boy competitors, a house maid* のごとく用いられるとき、この名詞は形容詞にもつとも近寄っていることを認めるのである。また、名詞のみならず、副詞も形容詞のよ一に用いられることがある。以上のごとく、名詞と形容詞と區別を困難であるが、さらに他の立脚點から見たら

ど一か、たとえ、形容詞は單純な性質を表彰するもの、名詞はその性質の集團を表彰するものと見たら、この區別は出來を、一なものである。「青い」というのは、色のある一種のものを表彰したので、思想の限界は單純である。けれども「薔薇」といへば、花に對する一般の性質のみならず、薔薇という特種の花の性質も表彰するのであるから、「青い」というのと違ふ。であるから、この立脚點から見れば、名詞と形容詞との區別は、整然として立つのである。けれども、その區別は整然として立つに違ないが、どこまでもこれを通すことが出来るかというに、それわまた六かしいので、形容詞でも單純な性質ばかり表彰しないこともあり、これに反して、名詞が單純な性質を表彰することもある。たとえば *warlike* とか *manly* とか、いふわ、決して單純な性質を表彰した形容詞とわ見られないし、*liac* とか *rose* とか、いふ名詞が形容詞に用いられた場合、單純な性質を表彰したものである。つぎに、名詞と動詞との區別は、ど一か、とゆ一に、これら體形の異同と、文の上における職能の異同とによつて、分かれるものと考へられる。けれども、イギリス語などにわ、名詞と全一の體形を有する動詞があるし、名詞が動詞として用いられること

もある。すなわち *to lord it, to chair a man, to table a motion* の如きもその一例である。また *I looked at the show, & I had a look at the show* との二文を比較して見れば、その職能もよく似寄っているのである。それで、動詞といえは、時法等を表彰するものというより、形態上の區別があるのであるが、然しながら、今日のイギリス語など、これらの形態上の特質も、よほど消滅している。ラテン語やギリシア語などにも、形態上の特質のあるものも、既に消滅している。それゆえ、これも當にわならない。また、或人動詞を單に、一時的の動作を表彰するのみであるのに、名詞や形容詞も永久的の性質を表彰するゆえ、その間の區別も整然として動かすべからざるものであるといっているが、形容詞にも一時的の性質を表彰したものがあつたし、動詞にも状態を表彰したものがあつたから、この區別もあながち正確なものといえない。つぎに、分詞、動詞と形容詞との性質を包有するものとして認められているものであるが、形容詞に比較して、分詞の特質もある動作、また、出来事、形容詞的に表彰する点にあるのである。また、分詞の時を表彰する、ということも、その特徴である。しかるに、継続的動作を表彰する現在分詞、すなわち *a knowing man* のことまで

た動作の結果を表彰する過去分詞、すなわち *a lost chance* のことまで、よほど名詞の性質に近寄っているし、*the anointed* のごとく、また、たゞ名詞として用いられた分詞も、形容詞と同じく一時的の動作も、事物の状態も、表彰するものが出来るものである。かの *nomen agents* である *the doer, the dancer* など、一時的の動作も、継続的の動作も、表彰し得るもので、その点において、よほど分詞に似寄っているものである。つぎに、副詞、わど、かというに、これら名詞から發達したものであること、わすてに述べたとおりである。しかるに、これら動詞も、よび形容詞に、密接なる關係を有するものである場合に、わ、多くの副詞も、形容詞から轉成することがある。それで、形態上から見れば、形容詞も、屈折を有するものであるし、副詞は、それと有せざるものであるから、その間に、ちのづから區別があるわけであるが、*to speak loud, to speak low* のごとく、文において、副詞と形容詞とを區別することが、困難である。かくのごとき例は、どの國語にもあるのである。また、副詞が他の副詞を修飾する場合に、形容詞となじく屈折することが、多くの國語にあることであるし、動作また、わその動作となす人物を表彰する名詞を修飾する形容詞、たとえば、*a good story, a*

good story-teller, an old bookseller のこときわ副詞的用法とちよつと區別がつきにくいものである。その意味の上から見ても、區別の困難な事が多いので、a bad coachman のこときわ性質の悪い馭者ということであるか、車の馭しかたの下手な馭者ということであるか、すこしく迷う。かくのごとく形容詞と副詞との區別を、一見明瞭なるごとくにしてはなはだ不明瞭である。それゆゑ品詞においてかくのごときもの形容詞かくのごときもの副詞というよゝに整然たる區別を設けることが出来ない。今日でわかれすこぶる曖昧に附して置くのである。

つぎに前置詞を元來副詞であつたが、漸々變化して現在のごとくなつたのである。もと副詞の表彰する動作の方向を示したものであるが、その後動詞から離れて名詞に附屬するよゝになつたのである。それでこの前置詞を連鎖語 (connecting word or link word) として認められているが、しかしながら連鎖語としての職分を盡すものゝ、單に前置詞や接續詞ばかりでない副詞なども随分この職分を盡し得るもので、それがやがて接續詞となり前置詞となつたものがなかく多いのである。しかるに副詞として用いられるときと前置詞として用いられるときと、その間の

區別が、はなはだ不明なことが随分あるのである。それで副詞としての従前の意義が、まつたく消滅したときわはじめて一個獨立の前置詞として成立つものである。すなわち、near や of が, in や on からまつたく分立したときにはじめてこれが一の前置詞、つぎに接續詞といふと、これをもつゝ副詞、またわ、代名詞から分生したものであるが、これらの言葉から分生する以前、すでにながく連鎖語として存在したのである。それで、これらの言葉が副詞として認められるか、代名詞として認められるか、はた接續詞として認められるか、ということわ、その語源から遠ざかる程度いかんによるもので、それから遠くなるにしたがつて、接續詞として獨立するよゝになるのである。それゆゑ、その中間にある場合にわ、どちらともつかず、はなはだ紛らわしいことがあゝくあるのである。

以上長々述べて來た通り、印歐語に於てわ、一定の原則によつて、その品詞を整然と分類するところが困難である。それで今日普通の文典に採用されている品詞の分類わ、文を組成する語詞の意義からと、その語詞が文の上に於て盡す職分からと、その語詞の体形からと、この三點から都合よく割振つた、一の折衷案である。然るに、わ

が邦の國語に於ても、印歐語に於て見ると同じ困難があるので、條理井然たる分類が出来ない。殊に今日てわ、この品詞の分類を果して合理的であるかど、その邊のとわ、少しも考えないで、ただちに西洋文典の文典における法式に従っているが、然しながら、その根本に遡って見ると、いま述べたよゝな困難があるのである。それで、西洋文典の法式が、國語の文典に應用されない以前に於て、國語學者わど、これを取扱っていたか、というに、僧契沖などは、これを體用の二に分けていたが、そののち富士谷成章わ、かれの著『脚結抄』において、品詞を名裝脚結杯^{シヨフキョウカ}の四種に分類していたし、鈴木朗わ、これを體の詞、形狀の詞、作用の詞、語辭との四種に分類し、東條義門わ、これを活くものと活かないものと、二種に分類し、鬼島廣蔭わ、これを言詞辭の三種に分類していた。その後、明治三十年に文部省で出版した、チャムパレ^{Champer}氏の日本文典にわ、働かざる辭と働く辭との二種に分ち、働かざる辭を實名詞、代名詞、副詞、接續詞、動詞、問投詞、關係詞の七種、働く辭を働詞、形容詞の二種に細別した。然しながら、何れにしても、一定の原則によって、一貫して分類したものでなく、また、今日の場合、これを一貫して分類するとわ、困難である、と考える。

第七章 言語上における諸法則の成立

これまで述べて來たのわ、主として國語を組成する要素すなわち單語の上に存在する現象および法則またわ、その上に存在する種々の事實についてであつた。しかるに、言語における種々の現象や法則わ、この單語の上には、かり發現するものでなく、これらの單語を連結配置して、一定の思想を表彰する場合においても、おなじく發現するものである。たとえば、われ、く、がある、思想を表彰するにも、單語を配列する上には、一定の法則が存在する。その法則すなわち、語詞の位置(Word-order)において、一定の約束が存在するのである。それで、英佛獨のごとき、國語における語詞の位置を見るに、主語が第一位に置かれ、述語が第二位に、目的語が第三位に置かれるのが、まづ普通一般の約束である。疑問文や命令文も、とより、其他特別の約束のあるものわ、例外であるが、普通の叙説文にわ、以上のごとき順序に語詞の位置が定まっているのである。支那語における語詞の位置も、大體英佛獨の諸國語と全一である。しかるに、日本語をそれとよほど状態を異にしているので、主語が第一位

に、目的語が第二位に、述語が第三位に置かれるのが普通の約束である。英佛獨のごとき國語、またわ支那語などにおいてわ述語がただちに主語につづくのが普通であるが、日本語においてわ述語がつねに文の後段となつてゐるので、この位置わ普通叙説の文脈においてわほぼ一定してゐるのである。かくのごとく、主語述語および目的語等も、一定の位置に配列して、それによつて、われわれの思想を表彰することであるけれども、語詞の位置によつてのみ完全に思想を明瞭に表彰することが出来る。とゆゑ、ことわらないので、このほか種々の手段によつてその目的を達することが出来る。その手段の主なるものお舉げて見ると、第一にある思想を表彰するにも、必要なる語詞を取並べて、その目的を達するので、これにわ述語とか目的語とかゆゑ、一定の語詞が、一定の位置に配置されるとゆゑ、ことがなく、ただ思想を表彰するに、必要な語詞だけお並べるのである。たとえは、

All nonsense! you coward!

あなた馬鹿。わたくし今日上野行つた

とゆゑ、よゝな文の形式で、これわ知識の幼稚な時代、またわその國語に未熟な人々

に、ちゝく使用されるものである。つまり、小兒とか外國人とかゆゑ、のわ屈折豆爾遠波などお正確に運用することが困難であるから、それらの人々が、ちゝく使用する形式である。第二に、語詞を連結してある思想を表彰する場合に、その思想を特に明瞭ならしめ、またわ誤解ならしめるために、その主要なる語詞を、つよめて發音することである。この語詞を強めるとゆゑ、ことわ思想を發表する上において、もつとも必要なことである。たとえは、

わたくしわ今日上野へ行つた

とゆゑ、よゝに「上野を」おつよく發音すれば、自分の行つたその場所を特に明瞭ならしめることが出来る。すなわち、自分の行つた場所を淺草でもなく、向島でもなくして、上野であることお表彰してゐるのである。けれども、

わたくしわ今日上野へ行つた

とゆゑ、よゝに「行つた」おつよく發音すれば、自分がきよゝ上野へ行つたことに、重お置いてゐることになる。すなわち、家に引籠つていたのでなくして、上野を出かけたことお言わんとしてゐるのである。かくのごとく、語調を、つよめて意義の明晰

を期することわも、とも必要なことであるので、ヨーロッパの諸國語にわ、随分發達しているのであるが、わが邦の國語にわ、あまりこれが發達していないよゝである。

第三に、語詞の抑揚である。語調の上に存在するアクセントは、意義の明瞭を期し、同音異義のものも混雜させないよゝにするのに、必要なもので、蟬と柿、雲と蜘蛛、龜と蟹との區別など、このアクセントであきらかにすることが出来るのである。けれども、これわつまり單獨なる語詞について、その相互の間における區別をあきらかにし、混雜を拒ぐに必要なるものであるが、語調の抑揚になると、一文章のスタイルも變更することが出来るもので、その結果、文章のある種類のものも、他の種類のものに轉移せしめるよゝになるものである。たとえば

Charles is ill

といえは普通の敘説文であるが、

Charles is ill?

とゆゝよゝに三に對する語調を揚げていえは、疑問文になる。かくのごとく、一の

文章も敘説文にしたり、疑問文にしたりするのわ、まったく語調の抑揚によるのである。日本語でわ、疑問文に「か」とゆゝ疑問の互爾遠波も、文の最後に付け加えるのが例であるが、口語にわいてわ、しばしばこれ省略して語調の抑揚によつてこれ補っている。

第四に、發音の長短である。すでに述べた第二に、發音の強弱であるし、第三に、發音の高低であるが、つぎに、發音の長短とゆゝことも、思想表彰の形式上に、必要な要素である。われわれがある語詞に重きを置き、その語詞も表彰している意義の明瞭を期する場合にわ、その語詞もつよくたかく發音する。もし、その語詞もつよくたかく發音すれば、自然の結果として、ながく發音するよゝになる。勿論ながく發音するといつても、それにわ度合があつて、音の分量も無暗に多くするとゆゝことわないが、しかしながら、普通の場合よりわ、いくらかながくなるのである。

第五には、前置詞、後置詞、接續詞、よゝひ、助動詞のごとき、語詞によつて、名詞や動詞も種々に結合して、各種の意義も表彰することである。すでに述べた語詞の位置からいえは、能相の形式としてわ、

John beats James. James beats John.

のごとく、二種の文章が成立するわけであるが、もしこれが所相の形式であつたら、ならど一かどゆ一と、おなじく二種の文章が成立するけれども、この場合に英語や日本語などでわただ二個の名詞と一個の動詞とのみで文を綴ることが出来ない。語詞の位置を第一に述べたよ一な手段などによって、ある思想を表彰することが出来るけれども、それわ單純な思想を表彰することが出来るだけで複雑なものになると、前置詞、接續詞、またわ、助動詞のごときものも、必要とするのである。けれどもこれらの諸要素を用いて複雑なる思想を表彰することわ、古代からあつたのでわなく比較的近世に發達したものである。第一に述べた手段のごときわ、もつとも舊くから發達したものであるが、これらの諸要素を用いることわ、言語の發達史上比較的新しいものである。

第六に、わ屈折すなわち、普通に、ゆ一 inflection である。たとえば、

Patri librum dat; His books; Father's, hat.

のごとく、語詞の屈折によって所有を示すこと、またわ、わが邦の國語における活用のごとく、語尾の變化によって、種々の職分を表現することなどわ、その一例である。この inflection とゆ一ことわ、思想表彰の上においても重要な要素であるが、しかしながらこれらも第五の諸要素とおなじく比較的近世に發達したものである。代においてわ決して見ることが出来なかつたものである。

われ／＼が種々の語詞を連結配置して、思想を表彰するにわ以上のごとき諸種の形式および要素が必要であるが、しかしながら、これわどの國語にもひとしく存在していることゆ一ことわないので、各國語において、それぞれこの存在の状態を異にしているのである。たとえば、印歐語の措辭上シヤクシヤクに存在している諸種の形式や要素と、ウラルアルタイ語の存在している諸種の形式や要素とわ、それぞれ異っている。印歐語においても、それらの形式や要素わ古往今來すべて一様であるかとゆ一に、かならずしもそ一でないで、その状態わ多少時代によって異っているのである。今日の語詞の位置に見るよ一な形式わ上古から今日に至るまで、ほぼ全一にあるが、しかしながらその他のものになると、各時代によってそれぞれ異っている。

ある。かくのごとく各時代により、各國語により、措辭上の形式あるいわ、その要素がそれぞれ異っているのわなにゆえてあるか。全一の思想を表彰するについても、英語や支那語など、主語が初位に述語がその次位に來て、目的語が最後に來るのが、一定の約束であるが、日本語で、目的語が主語の次位に來て、述語が最後に來るのが慣例である。かくのごとき差異をわとして出來たてあるか。これに慎重に研究すべき問題であると考える。

以上、思想を表彰するに必要なる語詞の配列および連結について述べたのであるが、思想を表彰するに必要なる措辭上の形式や要素を、ただこれらのものばかりでないで、このほか、呼應(Concord)のごときものも存在しているのである。たとへば印歐語について見れば、時性數格などの上にそれぞれ一定の呼應が存在している。また日本語について見れば、係結、時、敬相および副詞の使用法などの上に、一定の呼應が存在している。印歐語の格における一定の呼應を、格形上のものに過ぎないのであるが、さてこれわとして出來たものか、とゆくと、二個の語詞における相互の關係からてわないので、この二個の語詞が他の語詞に對して、同様の關係を

有するがために發生したものであるとゆふことである。それで、ラテン語やドイツ語、フランス語などにわ、その格を示す場合に、語詞の語尾がたがいに呼應するのである。たとえばフランス語で

Ce sont mes frères

(かれらわわたくしの兄弟である)

ドイツ語で

Das sind meine brüder

(同上)

イギリス語で

Those are my brothers

(同上)

イタリア語で

È questa la vostra figlia?

(これわなんぢの娘であるか)

スペイン語で

Esta es la espada,

(これわ劍である)

とゆふ文なども見ると、各語詞の語尾が、その格形上において、一定の呼應を備えて居ることがよく分るのである。その他、性により、數によりて、種々の呼應の存する

ことも、印歐語のごとき屈折語においてわすてに著明な事實である。
 わが邦の國語にわ屈折語において見るがごとき体形上の呼應わ、別に存在して
 ないのである。形容詞の語尾が、それが修飾する名詞の數や性によって變化する
 とゆゑ、こともなく、主語と述語とわ、その數によって、たがいに呼應するとゆゑ、こ
 もなく、格を示すために、各語詞の語尾がたがいに呼應するとゆゑ、こともない。主
 語の數わ單數であるゝとも、複數であるゝとも、これを受くる述語わ同一である。
 形容詞の語尾もそれに續く名詞の數によって變化するとゆゑ、こともない。つま
 り、屈折語に存在するよゝな体形上の呼應わ、日本語において見ることが出来ない
 のである。けれども、措辭上に、わ種々の呼應が存在するので、その主なるもの、お舉
 げて見れば、第一に係結の呼應、第二に自動他動の呼應、第三に能所の呼應、第四に時
 の呼應、第五に特性副詞の呼應のごときも、もので、これらの呼應わ、平安朝においてわ
 も、つとも正確に存在していたのである。それて係結の呼應たとせば、ぞとゆゑ、係
 に對してわ第三音で結ぶとか、こそとゆゑ、係に對してわ第四音で結ぶとかゆゑ、よ
 ゝにこれに一定の呼應の存在することわ、すてに足利時代から歌人社會で唱えて

いたこととて、今日でも中古文を作るにわ、この呼應の法則わ嚴重に守らなければな
 らん慣習になつてゐる。また自動他動の呼應とゆゑ、のわ(以下呼應の例略)

身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐ。

身修りて後に家齊ふ。

のごとく、自動詞わ自動詞とあい、伴い、他動詞わ他動詞とあい、伴うもの、おゆゑ、
 この呼應も誤れば、文意が朦朧となり、誤解も招き易くなるのである。勿論、異事の
 異行も記述する場合にわ、自動他動おたがいに混用することがあるけれども、この
 場合も除いてわ、かならず自己一定の呼應に従うのが國語における一の慣例であ
 る。つぎに、能所の呼應わ能相相おのゝ、あい、伴うもので、たとえば、

われ他を救ふ。 他我に救はる。

支那日本に攻められて、その地を取られたり。

のごとく、能所の區別も、つねに整然と立てて使用するものである。異事の異行も
 記述する場合にわ、能所も互用するけれども、それわ例外である。

つぎに、時の呼應は過去現在未來の三時お、そのおのゝ、宜しきに從つて用ゐるも

ので、同一の時代もしくはわ時日に起った事件も、三時たがい混用して記述するがごときわ、その呼應を破るものである。たとえば、

昨日は晴天なりしかば、近來まれに見る人出なりき。

明日空晴れば、人々出て行かん。

學校を建つとも、基本金を備へずば、維持し難からん。

國に賢君あるは、人民の慶福なり。

のごとく、未來わ未來で受け、過去わ過去で受けるのが、時の上における一の呼應である。以上に述べた自動他動および能所の呼應といふ述べた時の呼應のごときわ、印歐語にも、日本語にも、存在するものであるが、支那語の古文などにわ、これらの呼應のあるものわあまり嚴重に存在していない。とにかく、これらの呼應わ、思想表彰の上においてわ、もっとも須要なものであるが、よほどふかく注意しないと、しばしば誤謬を來すものである。

つぎに、特性副詞の呼應とゆゝのわ、副詞中ある一種のものわ、その修飾する語詞に、一定の用法を惹き起さしめるものがあるのので、その間の關係もゆゝのであるが、そ

の主なるものを挙げて見ると

【をさく】 下もかならず打消の語詞で受ける

【よも】【よに】 下もかならず打消の【し】で受ける、

【しね】 下もかならず「知らず」とゆゝ語詞で受ける、

【さらく】 下も打消、またわ、禁止の語、反語等で受ける、

【ゆめ】 下も禁止またわ、打消の語詞で受ける

【たとひ】 下にわかならず未定、またわ、未來の語、反語を置く、

【あに】 かならず反語で受ける、

【もし】 未定未來の語、またわ、疑辭で受ける、

その他、疑問あるいわ豫期等の意義を有する副詞が上にあるときわ、下にわ未來未定推量等の語詞を置くのが、當然なることわいわずとも、このことであるし、過去未來などの意義を有する副詞が上にあるときわ、下にわ過去未來の語詞のあい應ずることとも別にゆゝまでもないことである。

また、【何】の辭といふてある【なに】【たれ】【すべく】【しかに】【すつ】【など】【しく】な

どゆー語詞が上にあるときわ、その下にわ、大抵疑問の互爾遠波「か」が存在するのが慣例である。また、動詞や助動詞と互爾遠波との連続上にも、一種の呼應がある。たとえば、連用言を受ける互爾遠波、終止言を受ける互爾遠波、連体言を受ける互爾遠波などに、それぞれ一定の約束があって終止言を受ける互爾遠波、かならずしも連体言を受けるとが無く、將然言も受けるものと、已然言も受けるものとも、 \hookrightarrow 異っているのみならず名詞も受ける互爾遠波と、動詞も受ける互爾遠波とも、それぞれ定格があって、一樣でないので、つまり、その間に一種の呼應が存在しているのである。この呼應をすでに述べたと、り体形上のものでなくして、語詞も連結配列して思想を表彰する上における一種の呼應である。

かくのごとく、思想を表彰するにわ、品詞の上にも措辭の上にも、種々の法則が存在するのである。それで、これらの法則も嚴重に遵奉して、思想を發表するにあらざれば正確に自由に談話し記述したものとわいえない。われ \hookrightarrow がもし思想をあまりなくただしく發表し、傳達しよーとすれば、どこまでもこれらの法則を遵奉しなければならぬ。思想表彰の上においてわ、これらの文法上の法則とか形式と

かゆーものわも、とも大切なものである。これらのものわ、ひとり品詞の上におけるもののみでなく、措辭の上におけるものも、ともに同一のものであるが、その性質、論理的のものか、はた、心理的のものか、とゆーことわ、これらの諸法則の成立を論ずるに、ついで、まづ第一に、研究しなければならぬ問題である。

言語上の諸法則も論理的のものであるか、心理的のものであるかとゆーに、これを決して論理的のものでわないのである。論理的な法則であれば、數學や物理學などの上における諸法則のごとく、一定不變の真理の下に確立されたものであるから、方處によりはた、時代によりて、その法則が種々に變化するとゆーことわ、ないわけである。全一の事情の下においてわ、かならずつねに全一であるべき筈である。三の二乗が四であるのわ、いかなる時代においても、いかなる地方においても、つねに全一で、變化することわ、ない。三角形の二邊の和が他の一邊より大なることも、やはり全様であるし、物理學の諸法則にしても、全一の事情の下においてわ、全様である。これらの諸法則の變更、人間の意志によつて、その目的を達することが出来ないものである。しかるに、言語上の諸法則わどーかとゆーといふ、述べた數學

一六六
や物理學に於ける諸法則のよゝなものでない。決して万古不易なる真理の上に
確立されたものでないのである。しからばこれわいかなる性質のものかとゆ
に言語上に存在する慣習の上に確立されたものでつまり言語上に共通している
慣習を綜合してその結果を歸納した一の人為的法則である。デ、ある學者が論理
的法則からこれを區別して約束的法則(Conventional law)と稱えている。なぜ約束
的であるかとゆゝと、これわ一定不變の真理の上に確立されたものでなくして變
轉極りなき慣習の上に成立っているものである。その標準が時代によりはた方
處によりて變化すること、あたかも宗教法律もしくわ道德などにおける標準とよ
く似寄っている。一國の法律も道德も決して一定不變の真理の上に成立ってい
るものでなく、その社會の間に、自然に成立しているものである。つまり社會の慣
習を綜合して、その結果から歸納したものであるが、この慣習が自然に發生したも
の、以心傳心に約束されたものである。約束といつても會議を聞いて、かくのごと
くすべきものと定めたでもなく、政府からかくのごとくなせよと命じたでもなく
社會の間に自然に成立したものである。これわあたかも饑えたときに食を取り、

寒いときに衣を重ねると同様で、饑えたときに食を取り、さむいときに衣を重ね
よと會議を聞いて約束したことわないが、社會の人々が自然に全一の方法を取る
よゝになつたのである。これがすなわち一の慣習でこの慣習の上に成立た法則
わ人為的法則といつても、約束的法則といつても、よろしいのである。かくのご
とく、人為的であり、約束的であるものならば、方處により、時代により、自然に變化す
ることも、別に怪むに足らず、また、人力によつてある變更を試みることも、あえて困
難でないのである。現に大寶の律令と今日の法典とわ、種々の點において、その
標準が異つているし、日本と支那と西洋とわ、種々の點において、道德上の標準が異
つている。けれども、かくのごとく時代により、方處により、その標準の異なるのわ、約
束的法則の特質である。それとさなじく、言語上の法則も人為的であるから、その
標準が時代により、はた、方處によつて異なるわけて、奈良朝における言語上の法則わ
平安朝に至つてさゝいかに變化したし、平安朝におけるその法則わ、鎌倉時代に至つ
て、さらにはなほだしく變化した。万葉集においても、とも普通に使用された助
動詞や、豆爾遠波のごときもの、たとえば、

はぞ もぞ ぞも めかも ろかも よし やし しぞ ずけり こせぬ
かも さね そね ずば すらも けらしも いまだも

などわ古今集に至ってほとんど消滅してしまつた。また平安朝においても、
も嚴重に遵奉された係結のごときものわ鎌倉時代に至って、さほど嚴重に遵奉さ
れなくなつた。動詞助動詞と且爾遠波との連絡のごときも、よほど變化した。ま
た平安朝時代と今日とを比較して見ると、その變化の分量がさらに一層大きいの
で、たとへば、

- (一) 居れり 異れり
- (二) 導さす 復さす
- (三) 任さる 合さる
- (四) 周旋さる 勉強さる
- (五) 暮せし時 申せしかば
- (六) 花なるや 波なるや
- (六) だれなりや 幾何あるや

- (八) あるとも 勉強するとも
- (九) 知力なきも 雨降るも
- (十) あし、嬉し、

のごとく平安朝において、不正破格のものと認められていたものもすでに今日で
わ普通に使用されるよゝになつてゐる。かくのごとく、文法上の規則や形式など
が、方處により、時代によりて變化するのわ、ひとりが國の言語ばかりでわないの
で、いかなる國語においても、みなひとしくこの現象が存在してゐる。たとへば、英
語わ古代において正確なる屈折語であつたが、そののち段々變化して、今日でわ屈
折語の真相ある度まで失つてしまつたのである。それわ獨語にせよ、佛語にせ
よ、みな全様で、これらの國語わ古代のものとなつたものと今日のものとなつたものと
で古往今來すこしも變化しないとゆゝことわ、いかなる國語においても、まづ見る
ことが出來ない。されど、言語がたえず方處と時代とによつて變化することわ、ず
でに第一章において述べたとゝりであるが、言語がかくのごとくたえず變化する
ならば、その上に存在する法則も、それに伴つて變化することわ、明瞭な事實である。

かくのごとく言語の法則は時代により方處によつて常に變化するものであるが、この變化の一方が見れば、史的發達である。奈良朝と平安朝とわ、その言語上の法則が、いかに變つてゐるし、平安朝と鎌倉時代とわ、さらに一層變つてゐる。そして、法則の上に、史的發達の現象が存在すること、自然科學の上において、決して見ることの出来ないものである。數學上の原則にせよ、物理學上の原則にせよ、原則そのもの、一定不變なものでみだりに變化することがない。しかしながら、言語上の法則たとえば、『ぞるこそれおもひきやははりやらん』とゆゝより、な呼應、一時の約束、一時の慣習であつて、絶對的の眞理でも、なんでもないから、ある場合にわ、これが變化するところがある。その場合に、あたらしく變化したのが不正なもので、その變化しない以前のもものが正確なものであるとわいえない。變化しないものも變化したものも、ともにひとしくその時代の慣習であるから、いづれも正とも邪とも定めがたいのである。衣服でいへば、むかしの褌、袴が正雅で、今日のウキ、チンドン、ドレスが卑俗であるといへないとおなじく、その時代や方處で標準が變化するし、その變化のつまり、時々の流行であるから、一概にこれを排斥する

一七〇

ことが出来ないものである。つぎに、言語上の法則は、その時代の慣習に原づくもので、つまり、一時の約束によつて成立つものであるから、その法則は、かならずしも論理的範疇と精密に一致しないものである。たとえば、時の觀念を保持すること、わ思想發表の上において、もとも必要なことであるが、今日の書簡文で、過去の事實を現在で表彰するのが慣例である。論理的範疇と一致しないのわ、きわめて不都合なことであるが、それも一の慣習であつて見れば、やはり成立つて行くのである。男性、女性、中性のごときも、自然の性として、さるだけ一致さすべき筈であるのに、文法上、てわ、しばしば、それが一致しない。また、數に關する呼應のごときも、しばしば、自然のものといへば、一致するところがある。それ、たとえ論理的範疇と一致しなくとも、自然現象と背反しても、それが言語上の慣習として成立つ以上、文法上、正格なる法則として認容されるのである。思想表彰上において、文法的範疇 (grammatical category) と論理的範疇 (logical category) とが、嚴重に一致するを必要とするなれども、今日、いかなる國語でも、この兩範疇が、全然一致してゐること、わないのである。つまり、この兩範疇、わある

程度まで一致しているけれども他にその異った部分も存している。そのこと
それのごとき呼應論理上かたくなに保存する必要はないが文法上では必要
なるものとして遵奉されている。それでこの兩範疇も大体一致しているがその
一致している程度も時代思想のいかんによるものである。

以上述べたところで言語上の法則も時代により方處によって同じからざるもの
でありまた變るものであるとその文法的範疇と論理的範疇と精密に一致して
いないとがほぼ明瞭になつた。それと考へる。それで言語上における法則の性質
がすでに明瞭に了解されればかくのごとき法則のいかんにして成立するかとゆゑ
こともしたがって推測することが出来る。言語上の法則もとく一定不變の
眞理の上に成立しているものでないからその法則として成立つては、わあらか
じめかくのごとくすればよろしいと、かくのごとくしなればならぬものであ
るとかゆゑに熟慮を費すことゆゑにことわらない。ただはじめ思想を表彰する際
に偶然ある慣習が成立したとするとそれが類推作用の勢力によつてどん／＼他
の方面にまで擴延してその結果一の法則も成立しめるよゝになるのである。た

たとえば、の思想を發表するに當つて、まづ主語を第一位に、述語を第二位に、目的語
を第三位に配置するものもあり、述語を第一位に、主語を第二位に配置するものも
あり、主語を第一位に、目的語を第二位に配置するものもあつた。それとあつても、そ
れて初の中の人々によつて語詞の配置が異つていたがその中自然の約束によつ
て主語を第一位に、述語を第二位に、目的語を第三位に配置するとゆゑに、よゝな方法
が社會の多數の間に使用されるよゝになり、それが漸々勢力を擴大してついに一
の慣習となり法則となるよゝに至つたものと信ずる。かくのごとき語詞の配置
法が社會に勢力を得るよゝになつたのわなんらの眞理があるのでもなんでもな
い。たゞ社會人心の趨くところによつて自然にかくのごとき結果を生じたので
ある。かくのごとき結果を生じたのわ論理的勢力に支配されたのでなくして、ま
た、心理的動作に支配されたのである。今日社會の風俗習慣が思想の精粗知
識の多少また嗜好の如何によつて各地方において多少の差異を存していること
もなほ言語上の法則も以上のごとき事情によつて各地方においてそれぞれ趣
ち異にしている。たゞに各地方のみならず各時代によつてもやはり同様の現象

が存在している。これら畢竟この法則が成立たしめた勢力が論理的のものでなくして、心理的のものであるがためである。

言語上の法則が、まことに心理的勢力によって成立つたものであるとすれば、風俗習慣とおなじく、各地方各時代によって異なることも、變ることも別に怪むに足らない。つまり、その時その時に定まる一の慣習であるから、そのあるの当然である。また、その慣習がいかなる理由によって成立ち、いかなる理由によってかくのごとく成立たねばならないかとゆいことわ、一定の標準を以て、説明の出来るものでもないのである。それで、この法則が社會の間に自然に成立つた約束であるから、その根底において、動かすべからざる真理の存在することわないので、人心の赴くところによって、どいでもなり得るものである。人心の赴くところによって、たとえいかよゝに變化しよゝとも、社會がすでにこれに認容する以上、言語上の法則として、たゞ立派に成立つので、みだりにこれを否定することわ出来ない。これに反して、たとえ動かすべからざる鞏固な真理の上に成立つて、いるものでも、それが人心の赴くところとあい反して社會に認容されないよゝならば、言語上の法則とし

て成立つことわ出来ないのである。それゆゑ、言語上の法則として成立つた社會に認容されるとゆいことが、もつとも必要な條件で、これがもし認容されなくなれば、たとえその根據がどこにあるよゝとも、ついに廢滅に歸するのである。ぞるこれのごとき呼應が社會に認容されている以上、たとえまでも一の法則として成立つけれども、もし認容されなくなれば、早晩破れてしまふのである。それでこの呼應が破れても、一時の慣習の變化と同じく、絶對的真理が破壊したものといえない。ぞりこそるといふところ、社會がこれに認容するなら、破格でないので、三角形の二邊の和は他の一邊より小であるといふのと、まことに違ふ。數學上や物理學上の原則が破壊したもの、社會がそれいかに認容しよゝとしても出来ない。破壊がどこまでも破壊であるから、これら言語上の法則の場合と同一に視ることが出来ない。それゆゑ、この間の區別を立てることがもつとも必要なことである。

あむりに一言述べて置きたいの、こゝゆいことである。われわれが文法上の法則とゆい、の、文學者によって認定されたものか、はた、文法學者によって認定され

たものか、とゆゑ、ことである。これ、随分六かしい問題であるが、われ／＼の見るところで、文學者の認定したものと、一の法則とするのが穩であると考え。文學者、自分の見るところに隨て、舊來の言語の習慣を破壊することもあろし、また、あらたに一の習慣を創作することもあろし。しかるに、この舊習慣の破壊と新習慣の創作と、文學者、自分の立脚點からこれに反對することも知れない。これ、もって、文法の破壊と認めるかも知れないのである。けれども、たとい、文學者がこれ、もって、破格と認定するにしろ、これが社會の同情を得易いものである。すてに、文學者より、文學者の方が、はるかに社會の同情を得易いものである。すてに、社會の同情を得れば、たとい、文學者がこれを破格と認定しても、正格なるものとして、立派に成立して行くのである。それゆゑ、一大文豪が創作した新習慣、立派に文法上の法則として成立し、ものであるから、つまり、これ、文法上の法則と認容するか、ど、かわ、文學者より、むしろ、文學者の意見によるものであると考える。

第八章 言語の性質

われ／＼が、祖先以來、繼傳している言語、を、も／＼いかなる性質のものであるかとゆゑ、とこれ、われ／＼の思想を表彰する職分を盡す、一の要具である。われ／＼、れ、この言語によって、思想を表彰し、あるいわ、これ、他人と交換するのである。しかるに、これ、についても、とも、注意すべき、と、この言語と、思想との關係である。言語、を、思想を表彰する要具である、とすれば、いかなる状態において、これ、表彰するか、たと、え、われ／＼の、懐いて、いる、思想、わ、い、かに、複雑な、もの、でも、遺憾なく、これ、を、表彰することが、出来るか、と、ゆゑ、こと、が、い、に、研究すべき問題である。

言語、を、思想を表彰する要具で、この目的を盡すために、發生したものである、とすれば、言語、を、ま、たく、思想と一致すべき、等である。しかるに、實際の事實、を、多少相違している。言葉、を、換えて、い、え、ば、言語、を、思想を表彰する完全無缺の要具でない、で、十分精密に、これ、を、表彰することが、ほとんど不可能のことである。勿論、言語の思想表彰の要具として、完全なる程度、を、言語の種類によって、ことなるものである。

総合的言語とか分析的言語とかゆゑもので多少この状態が異っているのであるが、しかしながら、どちらにしても完全無缺とゆゑことわれない。つまり、言語の思想表彰の要具として、不完全なものである。それで、言語の思想表彰の要具として、いかに不完全であるかを述べて見よ。ならば、まづ思想において精密に區別し得べきものも、言語でわ出来ないこともあり、また、現に思想において存在している區別も、言語の上に存在していないことがある。たとえば、英語の如き分析的言語について、これを見るに、この言語において、主語述語および目的語の三種が、あらかじめ區別されているし、それに接辭 (copula) がときに區別されていることもあり、ときに述語に包含されていることもある。しかるに、いかなるものが主語で、いかなるものが述語で、いかなるものが目的語であるかを、外形によって區別する方法がある。言語の上に存在して居らないことがある。この區別が、實に屈折の形式で明であるべき譯であるが、それが今日英語などにおいて、すでに消滅している。その間の區別が不明になってしまつたのである。この屈折によって區別することが、全然存在しないので、わなく、まれにわ古代の面影を存しているものもある。け

れども、支那語におけるがごとく、多くの語詞がこの屈折によって區別が明にすることが出来ない。名詞と動詞とをわく固有の形式を具備しているが、それも屈折の消滅した結果、ほとんど區別が付かないものも尠くないのである。かのごとき場合に、名詞と動詞との區別を立てること、よほど困難であるが、しかしながら、この場合に、ただ一つこの區別の標準たるべきもの、語詞の位置である。この語詞の位置、英語でも古往今來ほとんど變化しないから、その標準となり得べきもので、この點も英語が支那語によく似ている。支那語で「善」とゆゑ語がこの位置によって名詞とも形容詞とも、また、動詞ともなり得るもので、その間に別に接辭が用いられない。英語で「格」や前置詞などで示す関係も、支那語で「や」は、位置で示すので、つまり種々雑多な思想、語詞を種々に配列して表彰するの、屈折によって示すこと、わないのである。それで、支那語で、主語を第一位に、述語を第二位に、目的語を第三位に配列するので、この順序で配列すれば、その文の意義は、明瞭になるのである。しかるに、英語で「か」とゆゑと、この語詞の位置をしばしば變換することがあるが、その場合においても、ことさらに意義の混雜を

惹起することがないので見ると分析的言語で、語形の區別も、位置の定例も、思想表彰の明瞭も期するのに、格別必要でもないので、大抵の場合に、その正確なる意義も解することが出来るのである。

分析的言語は上述の通であるが総合的言語になると、その結果がよほど違ふ。語形もその固有なものも有しているの、名詞、動詞、副詞とゆゝに、分立して、その間に語形においても使用においても、たがいに交換することがない。しかしながら、ラチン語など見るとこれに背反した例證はいくらもあるから、主語述語および目的語とゆゝよりな思想の區分、総合的言語でも絶対的に必要なものと思われぬ。たとえば、Erntとゆゝラチン語、主語と述語とを包含した、一の完全なる文であるのに、これにさらに主語を加えて Caesar Erntとゆゝことがある。けれども、別に思想の混雜も來たすことわぬ。また、分析的言語で、普通二語で表彰することも、総合的言語で、一語で表彰するけれども、これでも別に混雜わぬ。これら事實であるが、しかしながら主語と述語とのごとき根本的區別も有せざるもの、思想と言語との一致が十分完全に保たれているものと

わいえないのである。また、北米の土人が使用している言語は、主語も述語も目的語も、ま、た、く、一個の語詞に構成され、のみならず、便利を計るため、この三個の語詞が簡潔に融合しているの、どれが主語で、どれが述語で、どれが目的語であるか、不明である。ア、カ、チ、ア語で、目的語、主語と述語との間に挿入されて、その結果一語になっている。かくのごとき、総合的、法、式、も、取、る、も、の、わ、分、析、的、言、語、よ、り、わ、は、る、か、に、思、想、の、混、雜、も、惹、き、起、し、易、い、も、の、で、あ、る、の、わ、ほ、と、ん、ど、疑、の、な、い、事、實、で、あ、る。上述の結果によれば、文を構成する原素が、細密に分離すればするほど、この意義が明瞭になるわけである。けれどもこの明瞭とゆゝとが、かならずしも精密とゆゝこととてわぬので、たとえ英語などにおいて、單に一語のみで、十分意味の明瞭することがある。すなわち、名詞もなく、動詞もなく、單に *Here* とゆゝのみで、「こちらに出下さい」とゆゝ意味が、あきらかに分る。それで、感動詞にてもなると、單に一語で十分一文章の意味を表彰するので、つまり、感動詞、文の、い、ま、だ、發、達、せ、ざ、る、中、の、形、式、と、い、つ、て、よ、ろ、し、い。簡潔なる言葉として、感動詞ほど簡潔なものがなく、したがって、明瞭の程度も、はなはだ、尠いのである。けれども、感動詞、簡潔なるがた

めに、かならずしも混雑や誤解を惹き起すとわ限らないので、随分發達した文でも、しばしば誤解されることがある。ただ發達した文、この誤解される機會が比較的、明瞭であるし、総合的であればあるほど、一般にゆゑと言語が分析的であればあるほど、明瞭であるし、総合的であればあるほど、臆腫である。けれども、とにかく、どんな國語でも、思想が表彰した言語の形式が言語の形式として、まったく完全無缺であるとは、ゆゑのわぼとんと絶無といつて宜しいのである。

上述のごとく、言語を吾人の思想を表彰するための要具であるが、しかしながら、それがまことに不完全なものである。しかるに、ある場合に、言語が思想とほとんど一致したこともあるので、言語の發生や發達を支配する法則を、思想の法則すなわち論理とまゝたく全一であるものよゝに思惟し、それから文典上に種々の誤謬を勝發せしめたことがある。たとえば、文法家や吾人の思考すべき法式を確定すへき職務を有しこの法式について必要な要具を言語上に發見せんこと、盡力すべきもので、この職分によつて原因を表彰する形式として、インストルメンタルケースを創作し、動作を表彰する形式として、ゲーチーヴケースを創作したと

ゆゑよゝに考えている人があるが、これが大なる誤謬である。思想を表彰する形式として、もっとも須要なる原素たる主語と述語と、どの文にも備わっているものであるけれども、この以外に進んで、論理學の勢力を文典の上に及ばないので、つまり論理的範疇と文法的範疇とを全然一致すべきものでない。一、文法的範疇は論理的範疇から獨立して、言語そのものから創作されたものである。どの國語でも、それに固有なる言語上の法則が存在しているが、これらの法則をいかにして發生したものであるかわ、明瞭にこれを説明することが出来る。それがもし出来ないよゝな場合があるなら、これを説明するに必要な材料が缺けているときであるよゝと考へる。それをれ材料の備わっている以上は、かならずしもこれを説明するに困難を感じないのである。それで、文法的範疇に、それぞれ特殊のものがあるけれども、その思想を表彰するがために、この形式でなければならぬと、ゆゑとわかない。すべて文法上に、わかくのごとくならぬばならぬと、ゆゑとわかないので、全一思想を表彰するがために、種々の形式が並びもちいられることが、しばしばあるのである。『ぞるこそそれ』のごとき呼應を、必要缺くべからざるもので、わ

ので、この呼應が破れたところで、あながち思想の明瞭を缺くことわらないのである。また打消に「すぬね」「まじ」のごとく、種々のものがあるが、打消の思想はこの以外の言葉でわ表彰することが出来ないといゆ、譯もないので、これが打消を表彰するよゝになつたのわ、つまり偶然の結果である。それであるから思想を表彰する要具としてわ、種々の形式が存在する筈であるが、その中も、ともその目的に向つて適當なものも、とも社會に人望を得たものが、一般に使用せられしかして、文法上の法則として成立つよゝになるものである。それから言語と思想との關係についてわ、まづこゝゆゝことと前提として承認しなければならん。言語は思想を表彰する要具であるけれども、思想は言語によつてのみ表彰されるものでなく、言語は思想を表彰し得る要具中の一要具であるといゆゝことである。思想を表彰する要具としてわ、言語以外に種々のものがあるが、ただそれが言語のごとく、精細緻密に表彰することが出来ないだけで、思想表彰の要具としてわ、十分なる資格も有しているのである。それらの要具は、いかなるものであるか、つぎに述よゝ。言語以外における思想表彰の要具としてわ、まづ第一に身振 (gesture) とゆゝものが

ある。たとえば、敵を手の指で表彰するとか、首を振つて拒絶の意義を表彰するとかある。いわ手を動かして人を招ぐとか、とゆゝとわどの國民にも存在しているのである。これらのものわ、言語の如く、精細に思想を表彰し得るものでないけれども、またある場合にわ、言語によつて表彰し能わざる、微妙なる意義を表彰することが出来るのである。フランス人であるとか、支那であるとか、ゆゝ國民は、談話の際も、とも頻繁にこの身振を使用するので、この談話に趣味もあり、活氣もあるが、これに反して、英人や日本人など、この身振を使用するが甚だ尠いから、その談話が無味枯淡に流れ易い。それで、感情を表示するとか、比較的拙劣である。もし、談話と身振とが常に調和するならば、思想を一層明快に發表し得るのであるといふも。身振が思想表彰の一要具として、十分な價值も有することわ、かの啞者の場合に、いいて明である。啞者わ、まづ、たゞ言語を使用する能力を缺いて居るから、ただこの身振を使用するより外に、思想表彰の方法も有たないのである。それで、この身振を使用するよゝになるのわ、まづ、たゞ、模倣作用の勢力で、かれらわ、事物の、まづ、とも、特異なる點を、身振によつて模倣するのである。吾人が事物に命名する方法も、こ

れと全一で、その事物に特異なる點を取つて、その名稱とするので、つまり、啞者が事物に對して、それぞれ身振の形式を創作するのと同選ぶ所がないのである。そして、この身振も一定の形式に定まるまでに、しばしば繰返して使用され、その繰返して使用される中に、一の約束が成立し、ついに有意的のものとなつたので、その有意的符牒となる手續は、言語における場合とほとんど全一である。ただし、この身振の有意的符牒となる手續は、頗る簡單なもので、その成立のまゝ、たく不明なものもあつてある。

つぎに、思想表彰の要具として、もつとも有力なるものは、文字である。しかるに、ある人々文章は言語を代表したものである、文字は音聲を代表したものである、音聲は言語を離れて、わなにらの價值も有せざるものである、まとゆ文字も、發音されてのち、はじめて有意的のものとなるので、その動物の名稱を呼ばざる中、ほとんど無意味のものである、この文字がある一定の音聲を發生しないかぎり、ま、たく無意味のものである、といつてゐる。この議論はなるほど一應は尤である。けれども、羅馬字の起源を見るに、これら元來エジプトにおいて發達したもので、それ

から、フニシヤに傳わり、フニシヤからギリシヤに傳わり、ギリシヤからローマに傳つたものである。それで、エジプトにおいて、いかに發達したかとゆ、これらある音聲を代表する目的に向つて發生したものでなく、その發生した當時、一定の音聲を表彰したものでなくして、事物そのものも直接に代表した、いわゆる繪畫的のものであつた。この繪畫的のものが漸々發達して、最初の體形が消失し、ついに一定の音聲を代表するよゝになつたものである。この文字の發達を調査して見ると、元來口語からまゝ、たく獨立して創作されたものであつて、これらひとり、ローマ字ばかりでなく、アッシリヤの文字でも、支那の文字でも、やはり最初は繪畫的のもので、事物そのものの形狀を寫したものであつたのである。また、日本人が支那の文字を借用して、和歌なども表記したの、ただその音聲を借りただけである。それで、これらの事實から見ると、文字はまゝ、たく言語から離れて、思想表彰の要具として發達したものであるとゆ、ことが分るともいふ。

すでに續々述べて來たので、言語が思想表彰の唯一の要具でないことが、ほぼあきらかになつた、と考へる。言語、文字、ま、たび身振、ま、たび思想表彰の要具として、ま

とが出来る。このとき発生される母音がいかなる種類のものかわまつた舌と唇との位置によって定まるものである。口内諸器官によって氣息が妨げるときに発生するのわ無聲音で、いわゆる堅い子音(hard consonant)であるし、騒音が妨げるときに発生するのわ有聲音で、いわゆる柔な子音(soft consonant)である。それで氣息でも騒音でも舌や唇によって一旦その通過が妨げられ、そののちふたたびその通過が自由にされるときにその自由にされた瞬間に断音、またわ破裂音と呼ばれる(momentary consonants—Explosive) k, t, p, b, d, じが發生する。これわその瞬間においてのみ發生するもので、永続するものでなく、ま、たぐ一時的のものである。また舌や唇によって十分氣息の通過が妨げずして、ただ通過の際多少摩擦せしめる位の程度に止めるときわ、いわゆる摩擦音(frictive)と呼ばれる h, dg, s, z, sh, zh, r, l, m, th, dh, wh, w, f, v, m が發生する。これわ永続して發生せられるものであるから續音(continuous consonants)とも呼ばれている。この續音の中に鼻音(nasal)と稱するものがある。これわウヰラを開き、騒音の一部分として鼻孔を通過させて發生するものである。

以上述べたと、り子音、わ堅い音、柔かい音、断れる音、續く音、またわ破裂音、摩擦音、鼻音とかゆゝよゝに分類されているが、これらの分類わもとよりクロスデイ、ゲイ、ンで、一貫したものでない。このほか氣息と騒音とが口腔を通過するとき、その通過が妨げる口腔の場所によつても分類されることがある。たとえば舌の後部が口蓋に隆起させて、その通過が妨げるときわ喉音(velar consonant) ng, k, g が發生する。ドイツ語における g, イギリス語における r など、舌が口蓋に隆起させて發生するもので、その點わ r や g に似ている。舌の中部が口蓋の中央に隆起させて、騒音が流出せしめるときわ、w が發生し、舌の中部と尖端とが口蓋の中央と前部とに隆起させ氣息も流出せしめるときわ、口蓋音(palatal) s が、騒音も流出せしめるときわ、n が發生する。舌の中部と尖端とが口蓋の中央と前部とに近寄らしめれば、sh と p とが發生する。齒の背後即ち口蓋の前部に舌の尖端が隆起させるときわ、舌音(dental) t と r とが發生する。氣息もして舌の中央と尖端とが通過すれば、r が發生し、舌の兩側が通過すれば、l が發生し、舌の尖端が上齒に密接せれば、堅い p と柔い p とが發生する。上齒と下唇とが密接せしめて、氣息が騒音

